



崇城大学 大学教育再生加速プログラム(AP)

SOJO University Acceleration Program for University
Education Rebuilding : AP

令和元年度 取り組み報告書

崇城大学「大学教育再生加速プログラム」令和元年度報告書

目 次

I. 取り組み概要	1
I – 1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等.....	1
I – 2. 事業の全体像.....	2
I – 3. 令和元年度の事業計画.....	5
II. 令和元年度取り組み報告	6
II – 1. 成果概要.....	6
II – 2. 全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果.....	18
II – 3. 元年度の全学 SALC・学科 SALC での学修指導の時間割表	30
II – 4. 元年度の開催事業：ファカルティデベロッパー鍛成会.....	31
II – 5. 元年度の広報活動：本 AP 事業のパンフレット作成	39
II – 6. 元年度の広報活動：大学ホームページへの本 AP 事業のページ作成	41
II – 7. 令和元年度の学生の主体的取り組み報告.....	41
1) タイ農業発展に挑戦中の本学3年生が文部科学省「トビタテ文化祭」でグランプリ受賞	
2) 本学大学院生が起業した(株)Ciamo が「地方創生ビジネスコンテストみんなの夢AWARD」でグランプリ受賞	
3) 教職希望学生が学修サークルを立ち上げ現役採用試験3年連続合格者輩出	
II – 8. AP 中間評価に対する対応	44
1) 学習アドバイジングスキルを専門科目の学修に活かすには.....	44
2) 事業評価のための学内アンケート及び外部テストの活用.....	45

I. 取り組み概要

I – 1. 大学全体の改革方針における本事業の位置付け等

本学は、戦後まもない昭和24年（1949年）、前理事長・学長 中山義崇が「戦後日本の疲弊を救う道は産業の振興と産業人の育成にある」と痛感し、私塾を創立したときに端を発する。以来、約65年間に渡って、「体・徳・智」という理念の下、科学技術を通じて地域社会に貢献する人材を育成してきた。平成12年（2000年）芸術学部の新設に併せて、校名を熊本工業大学から崇城大学へ変更し、さらに平成17年（2005年）薬学部を開設して、5学部体制となって現在に至っている。また、全学科から大学院進学への道が開かれている。

一方、平成5年（1993年）から始まった18歳人口の減少や、同年齢の若年人口の過半数が高等教育を受けるというユニバーサル化、日本社会のグローバル化の進行などの環境の変化の中で、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年）や、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（平成24年）などを受けて、現理事長・学長 中山峰男は「社会を真に救うには、たとえ一隅といえども、社会を変革し続ける能力を持つ人材の育成が急務である」と考え、その育成のため、(1)グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2)イノベーション・発明発見能力の鍛磨、(3)起業家精神の陶冶、なる3大方針に基づいた、本学の教育改革を行っている。特に(1)については、平成23年「崇城大学教育刷新プログラム(SEIP)」をスタートさせた。それは、(A)体・徳・智の三育増進によるグローカル実践育成プログラム、(B)オーダーメード型自立支援プログラム、(C)教育評価制度・組織改革プログラム、(D)教職員のFD/SD推進プログラムの4本柱からなる。また、本学では、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、平成22年度より15名に及ぶネイティブの教員によるSILC(Sojo International Learning Center)を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。同時にアクティブ・ラーニングの実施のために、SALC(Self-Access Learning Center)なる施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムをも構築してきた。全学学生数約3,500人の内、SALC利用者数は4年目で当初の10倍以上の約18,000人/年まで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。しかし、上記の三大方針(2)、(3)を実現するためには、卒業研究の質のさらなる向上をはかるとともに、全学年での学生の能力開発を積極的に行うことが必要であり、そのためには、多くの専門科目等におけるアクティブ・ラーニングの普及が課題となっている。

そこで、本事業においては、これまでSALCで培ってきた自律学修マインド育成のノウハウを、全学の専門科目等に波及浸透させることを目的として、本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学SALCならびに学科SALCを設置する。また、これらのSALCにおいて、個々の学生の自律学修を促し、各専門科目の講義と図書館利用を連携させる、ファカルティーデベロッパー（教員）及び学生ファシリテーターの育成を目指す。さらに学生証をICカード化し、図書館の入退館システムと連動させて、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかる。

I – 2. 事業の全体像

上述したように、本学では平成 25 年度より中長期計画として、(1) グローバル時代に対応する社会人基礎力の養成、(2) イノベーション・発明発見能力の鍛磨、(3) 起業家精神の陶冶、なる 3 大方針に基づいて、教育改革を行っている。特に(1)については、すでに平成 22 年度より、グローバルに活躍できる技術者育成を目指して、英語教育の抜本的見直しを行い、15 名に及ぶネイティブの教員による SILC(Sojo International Learning Center) を立ち上げ、英語によるコミュニケーション重視の英語教育を行ってきた。また同時にアクティブ・ラーニングのための

SALC(Self-Access Learning Center) の施設も設置し、専任教員を配置して、独自の英語教育の自律学修プログラムを構築してきた。右図は、SALC の年間延べ利用者数の変化を示している。SALC は、開設当初こそ、年間の述べ利用者数が約 1,500 人（全学学生数約 3,500 人）であったが、開設 4 年目の平成 25 年度は、年間約 18,000 人にまで増大し、本学学生の自律学修マインドの育成に貢献してきた。

この育成のノウハウのポイントは、次の 3 つである。

- ① DVD や書籍などの英語教材と設備を備え、ICT(Moodle) を活用した講義外の自律学修ができる（宿題等の実施も含む）。
- ② ラーニングアドバイザー（専任教員）が 3 名、専従職員が 1 名常駐し、学習アドバイジングスキルを活用して、教材の選定や学習方法の助言（主体は学生）を行う。
- ③ SALC アクティビティーを独自に作成し、学生が利用した分を 10% SILC の成績に反映する。

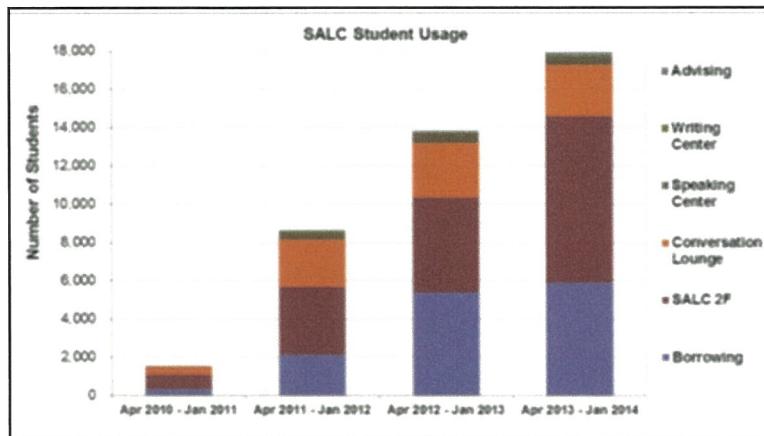


図 SALC 利用学生数 2010 年 4 月～2014 年 1 月

これらの学生の自律学修を促すノウハウを、全学の専門科目等に波及させることによって、本学における教育の多くがアクティブ・ラーニングの要素を取り入れることが可能になり、学生の主体的学びの促進、学修時間の確保につながることが期待される。そこで、本事業においては、上記、中長期計画の 3 大方針の(1)グローバル技術者育成をさらに加速し、(2)(3) の基礎となる学生の主体的学びのマインドを醸成するために、具体的に次の事業を行う。

(I) 全学的なアクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC および学科 SALC の整備とファカルティーデベロッパーの養成、および図書館との連携

本学では以前より、講義に関連した指定図書等を毎年選定して図書館に配置してきたが、学生の利用については十分とは言えなかった。そこで 26 年度より、講義の課題として、この指定図書等の図書館蔵書を利用したレポート提出を、全科目について義務付けるように全教員に依頼した（シラバスにおける具体的準備学修内容の記載）。前述の SALC においては、「SILC 講義の課題→ SALC でのラーニングアドバイザーによ

る自律学修のサポート→講義外の学修時間の確保→課題または課題以外のワークシートの提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環が回り、SALC の利用者も非常に増大している。そこで、この自律学修の好循環を全学の専門科目等に普及するため、全学 SALC および学科 SALC を整備し、自律学修をサポートするファカルティーデベロッパー (FDer) を配置するとともに、大学院の全専攻 (10 学科に相当) から学生ファシリテーターを選抜し、主に専門科目の課題相談・学修を支援する。これによって「専門科目等の課題→全学 SALC ・ 学科 SALC での FDer ・ 学生ファシリテーターによる課題作成のサポート→図書館の指定図書等の利用→課題または課題以外のレポート提出→講義の理解（単位の実質化）と成績の向上」の好循環を作る。

全学 SALC は、当初は学内のはば中央に位置し 25 年度に竣工したアクティブコモンズ（多目的講義棟）の 2 階に整備したが、その後、上述した図書館との連携を深めるために、図書館 1 階に移設した。また、学科 SALC は、各学科棟につつずつ整備する。本学では 23 年度から「崇城大学教育刷新プログラム (SEIP)」を実施し、その中で「教育重点教員制度」を構築した。これは教員の教育業績を評価し、昇格等に反映させる本学独自の制度である。そこで、これまでの 4 年間の SALC 活動で培った学生の自律学修を支援するノウハウを、二か月に一回行われる FDer 錬成会を通じてこの教育重点教員に伝承し、FDer を養成する。FDer の活動は、教育業績に反映するようとする。26 年度は、FDer を教養教育を担当する総合教育から 1 名、各学科から 5 名養成し、31 年度までに各学科で 1 名の FDer を養成する。また、各専門科目の課題の相談に対応するために、大学院の各専攻から毎年 1 ~ 3 名の学生ファシリテーターを選抜し、この全学 SALC および学科 SALC に日替わりで駐在させる。彼らは FDer とともに、各自の経験を活かして、課題を遂行させるために学生の図書館利用を促進させる。また、このために学生証を IC カード化し、図書館の入退館システムと連動させることで、学生の図書館利用時間を学科・学年・授業科目ごとに把握できるようとする。また、このデータを各科目担当教員にフィードバックし、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる。

（II）学生の海外留学の促進のための SALC 機能の拡張と優れたリーダーシップを持つ学生の養成

本学では以前より、海外の大学との提携を拡大し、現在、世界 11 か国 22 大学との協定を結んでいる（25 年現在）。また、26 年度より、学則に留学規程を設けるとともに、全学的な奨学金制度を設け、学生の留学促進、協定校での学習成果の単位化を目指し、制度の整備をすすめている。

そこで、グローバル技術者育成を目指して、ネイティブ教員によるコミュニケーション重視の英語教育を行っている SILC での講義の目標として、海外留学を掲げ、これを促進するために、SILC/SALC に、異文化コミュニケーション講座を開設する。そして、これまでに留学経験のある学生を、留学ファシリテーターとして SILC/SALC に駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。

上記（I）（II）における学生ファシリテーターや留学ファシリテーターは、下級生や他の学生にこれまでの経験を教えることで、自らが、学びの成果を再構築することができ、また、その過程でコミュニケーション能力を養うことが可能になる。これらのファシリテーター業務そのものが、眞のアクティブ・ラーニングといえる。これらのファシリテーターの経験をつませることで、各学科・各専攻に、毎年複数の優れたリーダーシップを持つ学生の養成を行う。

大学等名：県城大学 テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

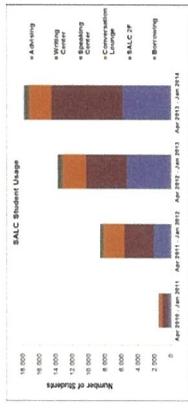
●取組概要：本学独自の英語教育施設(SILC: Sojo International Learning Center)に併設した自律学修センター(SALC: Self Access Learning Center)では、学生が主体的に学修し年間利用者数が4年間で12倍に拡大した。このSALCのノウハウを全学に普及させ学生の自律学修のマインドを醸成するとともに、専門科目のアクティブラーニング(AL)化を推進するため、に全学SALC/学科SALCを設置し、利用時間を可視化して単位の実質化を目指す。

～ALの基礎となる学生の自律学修の醸成とALの普及、単位の実質化を目指して～

これまでの取組

県城大学英語教育施設SILC

- ・グローバル技術者育成のため、本学独自に2010年に設立
- ・ネイティブ教員約15名で、講義はすべて英語で実施
- ・学生の英語自律学修を促す支援センターとしてSALCを設立
- SALCの特徴**
- ①DVDや書籍などの英語教材を備え、ICT(Moodle)を活用した講義外の自律学修(アクティブラーニング)ができる。
- ②ラーニングアドバイザーが3名が常駐し、教材の選定や学習方法の助言(主体は学生)を行う。
- ③SALCアクティビティ(ワークシートなど)を独自に導入し、利用した分を一定の割合でSILCの成績に反映する。



⇒ SALC利用者が4年間で12倍に拡大。
学生一人が年に5回は利用。

これから取り組む

全学SALC/学科SALCの機能とファカルティディレッシャー(FDer)の役割
FDer&学生フシリテーターによる講義課題等に対する学生の
自律学修を促す助言の場(図書館の学科推薦図書等の利用等)

①



SALCのノウハウを普及させるためのFDer錬成会を開催。(FDerの活動は、本学独自の教育業績評価に反映)



②FDerを中心とした各専門科目にALを普及し、全学/学科SALCで実施
⇒ 主体的に行動できる社会人の育成

・本事業を実施することことで、22年度よりSILC/SALCを立ち上げ取組んできたアクティブ・ラーニングを全専門科目に普及させ、主体的に行動できる人材育成を加速する。

・本事業実施により、各学科に学生の主体的学びを支援する学科SALCが設置され、FDerの錬成によりFD活動が活性化される。

	26年度 (実績値)	28年度 (実績値)	31年度 (目標値)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	92.9%	100%
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数の割合	35.6%	52.8%	60.0%
アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合	60%	61%	70%

【事業の成果】

I – 3. 令和元年度の事業計画

令和元年度の本事業は、引き続き平成 30 年度同様の目的のもとに行う。学科 SALC の設置は平成 28 年度で完了しており、アクティブ・ラーニング (AL) の質を向上させるために、30 年度と同様に、全学 SALC および学科 SALC でのアクティブ・ラーニングで使用する書籍等を計上するとともに、学科 SALC アクティビティーを取りまとめる。また、専門科目への SALC アクティビティーの普及を目指すためと、学習アドバイジングスキルを含んだ本学独自のノウハウの伝承のために、2 か月に一回の頻度で、FDer および学生ファシリテーター（学生 FC）からなる FDer 錬成会を開催する。この FDer 錬成会には、SILC/SALC の教員および外部講師を呼び、学生の自律学修マインド育成に関連するテーマの研修会も企画する。また、連携大学である神田外語大学で行われる「学習アドバイジングスキルトレーナー研修会」を活用し、本学教員のトレーナー養成のための費用を含めた謝金・旅費・会議費を計上する。この学内トレーナー育成によって、AP 事業終了後も、学習アドバイジングスキルの講習会を学内で複数回、全教員を対象に行うことが可能となり、FDer 養成への寄与が大きい。この FDer の活動は、本人の教育業績としてカウントし、個人配布予算や教育重点教員としての昇格に反映させることで、インセンティブを持たせる。

また、本学 AP 事業の中間評価で指摘された「学生の自律学修マインド育成の成果」の客観的評価を検討するために、外部テストとして、平成 30 年度には、学生のコンピテンシーを評価できる PROG テストを全学科の 3 年生（薬学科は 4 年生）を対象に実施した。この結果を踏まえて、令和元年度は、この種の外部テストの中から「学生の主体性」に焦点を当てたテストを全学科の 1 年生を対象に実施する。本学では、本事業を発展させる形で、平成 31 年度から、すべての教科での振り返りを実現する SOJO ポートフォリオを含んだ「崇城大学教育刷新プログラム II (SEIP-II)」を実施する。そのためにも、平成 31 年度の 1 年次から、「学生の主体性」がどのように育成されていくかを、この外部テストで評価していく予定である。また同時に、全学生を対象にした「在学生アンケート調査」を本学総合企画課 (IR) を中心に実施し、「主体的に学ぶ力」や「課題解決力」等が身に付いたかどうかを調査する。

上記の FDer 錬成会については、地域の高校教員にも開放できる開催日を設け、高校生に寄り添いながら、高校生のメタ認知能力を上げ、自らが明確な学習目標を設定し、目標達成に向けて行動ができ、さらには高校生が自分にあった学習方法を自ら選択するようにサポートする研修を共有する。この研修によって、高大接続 7 年間の中で、一人の学生の成長段階に応じた AL の在り方・アクティブ・ラーナーを育成するための教育プロセスを独自に作成することを試みる。

また特に、令和元年度には、この事業取組を近隣の他大学にも広めるため、連携協定を締結している熊本保健科学大学、並びに熊本学園大学にも、この FDer 錬成会を開放し、その成果を踏まえた講演会を共催で開催する。

特に令和元年度は、本事業の最終年度であるため、最後のまとめとして、すべてのアクティブ・ラーニングを導入した科目の中で、最も学生の図書館での自律学修の時間が長かった科目の担当教員を、本事業で導入した学生 IC カードと図書館の入退館システムのデータ等をもとに選定し、現行で行われている学生の授業アンケートをもとに選考されたベストティーチング賞とともに、ベストアクティブ・ラーニング賞として表彰する。また、この事業取組を他大学にも広めるため、本学の取組をまとめた「学習アドバイジングスキルガイドブック（仮題）」を出版し、配布する。

学部・大学院の各学科・専攻から推薦された学生ファシリテーターには、その活動時間に応じて謝金を支

払う。また、SILC/SALC での留学支援は引き続き行い、国際交流センターとの共同で、異文化理解・留学促進のための異文化交流イベント・留学報告会を開催するとともに、留学ファシリテーターとして学内の留学相談窓口である国際交流センターに駐在させ、学生の留学相談の機能を充実させる。この留学ファシリテーターにも、活動時間に応じて謝金を支払う。

本学の本事業は、アクティブ・ラーナーを育成するためにマインドの育成、いわば入口の取組といえるため、令和元年度は、他の AP 採択校、特にテーマV（卒業時における質保証の取組の強化）の採択校への視察の回数を増やし、出口の質保証につなげるための参考とする。

II. 令和元年度取り組み報告

II-1. 成果概要（令和2年2月時点）

令和元年度の本事業では、英語教育施設(SILC)の中に設置したアクティブ・ラーニングのための Self-Access Learning Center(SALC) の独自の自律学修プログラムのノウハウを、全学の教養科目・専門科目に普及することを目的として、以下の①～⑪を行った。まず本学アクティブ・ラーニングの拠点となる全学 SALC、及び各学科 SALC の設置を完了した。また、全学科から学生の自律学修を促すためのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターを選抜し養成した。これによって、アクティブ・ラーニングの講義数を増やすとともに、専門科目の講義で出される課題の自律学修をサポートし、講義と図書館の利用を連携させた。そのために、図書館に入退館システムを導入し、学生の自律学修時間を把握し、単位の実質化をはかった。

これらの取り組みの成果として、全学 SALC の設置およびファカルティデベロッパーの養成によって、アクティブ・ラーニング形式の講義を受講した学生の数は、25 年度が 1182 人（全学の 1～3 年（薬学科は 1～5 年）の学生数 2453 人に対して 48.2%）であったが、令和元年度は 2852 人（（全学の 1～3 年（薬学科は 1～5 年）の学生数 2852 人に対して 100%）と増大した（令和元年度の目標は 100%）。これによって、すべての学生が、各学年で必ず主体的に学ぶ講義を受講することになった。また、ファカルティデベロッパー鍛成会によって、ファカルティデベロッパーの各教員は、対話を通じて学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」を身に付けつつある。これによって、授業の課題に対して、学生自らが主体的に学習する環境が整いつつある。また、学生の図書館での自律学修時間の把握が行えたので、今後、この時間の増大を目指にして、単位の実質化につなげる予定である。

また、本事業の取組は、平成 30 年度より崇城大学教育刷新プログラム (SEIP-II) に独自に発展し、全学の科目のシラバスに記載されている学修到達度目標に対して、学生がどの程度目標が達成されたかを振り返るポートフォリオを実施することとなった。このポートフォリオは、コンピューター上で学生の自宅からでも行えるようにし、最終的に、科目の評価点に結びつけることが全学的に決定している。また、シラバスの成績評価方法の記載欄には、中間試験・レポート・小テスト・成果発表など、これまでの定期試験のみによる評価から、多面的な成績の評価を行うように改訂した。これらの教育改革を、「学生の自律学修マインドを醸成する」本 AP 事業と連動させることによって、「学生が何を学んだかではなく、何ができるようになったか」を常に振り返り、学生の主体的な学びを育むことを目指した。

① 4月～ 今年度学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの養成

令和元年5月に学生ファシリテーター・留学ファシリテーターの研修を行い、元年度は、各学科から推薦された学生ファシリテーター43名、留学経験のある学生から選抜された留学ファシリテーター9名が養成された。

また、各学科SALCの取組を学生ファシリテーター同士で情報共有するために、SALCネットを立ち上げた。SALCネットのミッションは以下のとおりである。

- ①全学SALC・学科SALC・留学アドバイジングルームの利用状況の情報共有を、ファカルティデベロッパーの教員とともに定期的に行う。
- ②上記の施設（総称して学科SALCという）の利用を促進するための改善案や、教える喜びや関わる楽しさや悩みについて、定期的に意見交換を行う。
- ③学科SALCに限らず、学内で主体的に活動している学生にも、SALCネットへの加入を勧め、活動の内容を広く学内の教職員に知ってもらう。
- ④後輩の学生ファシリテーター・留学ファシリテーターを育てるための研修会へ協力する。

上記SALCネットの会を、ファカルティデベロッパー(FDer) 錬成会（30年度は7回開催）を兼ねた形で、令和元年度は8回開催し、学生と教員の視点の共有を図った（第36回FDer錬成会は新型コロナウィルス感染防止対策のために中止）。これらの取り組みの成果として、学生ファシリテーター（学生FC；大学院生など）・留学ファシリテーター（留学経験学生など）が、後輩学生の主体性を育む学生への接し方や、各自のスタンスなどが身に付いたものと思われる。特に、後輩の学生が少しでも自ら話す環境（場）を作ることの重要さ、話しやすい雰囲気を作るための方法などについて、各学科SALCの取組を共有することで、さらに改善されたものと思われる。これらの学びは、彼らが優れたリーダーシップを有する学生に成長するために非常にためになったと思われる。

② 4月～3月 錬成会によるファカルティデベロッパーの技量養成

○5月25日第29回ファカルティデベロッパー錬成会・SALCネットの会（対象：全教職員・学生）、並びに2019第1回大学人教育力養成講座「ベストティーチャーから学ぶ」（（対象：着任3年までの45歳以下の新人教員、話題提供：宇宙航空システム工学科航空操縦学専攻久次米通孝先生）

本錬成会は、本学独自に開催している大学人教育力養成講座と連携して行った。この講座の目的は、下記の3つであり、FDer錬成会と趣旨を同じくしているため、AP事業終了後も、本学独自に継続していくものと考える。

- 1) 学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- 2) 学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」「学習アドバイジングスキル」について体験を通して学ぶ。
- 3) ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

昨年度ベストティーチング賞受賞者の久次米先生から、授業改善のポイント・学生へ向き合うスタンス・主体的な学びの醸成などについて話題提供していただき、参加者全員でグループワークを通して学んだ。この錬成会を通じて、新人の教員の先生に、本学のAPの取組を知っていただくと同時に、アクティブ・ラーニングの授業の実例などについて知る機会になったものと思われる。参加者：39名（教職員23名、学生16名）

- 6月27日第30回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会(対象:全教職員・学生)(テーマ「学科 SALC の活動状況報告」、話題提供:ナノ SALC チーム)。ナノサイエンス学科の SALC の 1) 利用状況の情報共有、2) 利用促進のための改善案の提案、3) 学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、4) 後輩のファシリテーター育成 を目的として報告と提案があり、それをもとに、グループワークを通じて各学科 SALC への活かし方について学んだ。参加者:25名(教職員12名、学生13名)。
- 7月24日第31回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会(対象:全教職員・学生)(テーマ「学科 SALC の活動状況報告」、話題提供:応微 SALC チーム)。応用微生物工学科の SALC の 1) 利用状況の情報共有、2) 利用促進のための改善案の提案、3) 学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、4) 後輩のファシリテーター育成 を目的として報告と提案をもとに、グループワークを通して各学科 SALC への活かし方について学んだ。参加者:22名(教職員14名、学生8名)。
- 9月13日第32回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会、並びに2019第2回大学人教育力養成講座(対象:全教職員・学生・熊本保健科学大学教職員・熊本学園大学教職員)テーマ「学習アドバイジングスキルと SALC 活用について」話題提供:宝来華代子先生(FDer・SILC/SALC)、大嶋康裕先生(FDer・総合教育センター))英語教育で始まった「学習アドバイジングスキル」を全学ならびに他大学にも広く普及するため、同スキルのトレーナー研修を受講した本学の宝来先生より同スキルの研修を行い、本学の数学 SALC で、同スキルを活用している大嶋先生より数学教育における活用例を報告いただいた(学習アドバイジングスキルの詳細は、II-8に掲載)。その後、参加者全員でグループワークを行い、同スキルの実践を行った。参加者:34名。(本学25名(教職員18名、学生7名)、熊本保健科学大学教職員7名、熊本学園大学教職員2名)
- 9月19日第33回ファカルティデベロッパー鍊成会(対象:全教職員・学生(特に空港キャンパス)、話題提供:全日本空輸株式会社 整備センター 教育訓練部部長 細見 光徳氏、テーマ「社会が求める大学卒・整備士とは」))
- 本学には全国で初めて、航空整備士国家資格を取得できる学士教育課程が設置されている。これまで専門学校でのマニュアル重視の航空整備士養成課程から、汎用的基礎力を身に付け、様々な課題に対処できる学士力を有した航空整備士を育てるために必要な教育課程・教育手法が模索されている。この中には、学生の主体的な学びの醸成は不可欠であることから、本事業の取組として、宇宙航空システム工学科の FDer を中心に鍊成会を行い、ANAにおける整備業務の実態や整備士に求められる学士力に通じるものなどについて学ぶことができた。学生からも質問があり、整備士とパイロットの関係など、普段は聞けない現場の状況を知ることにつながったと思われた。参加者:34名(教職員14名、学生20名)。
- 10月29日第34回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会(対象:全教職員・学生)(テーマ「応用生命科学科 SALC の活用状況について」、話題提供:生命 SALC チーム)。応用生命科学科の SALC の 1) 利用状況の情報共有、2) 利用促進のための改善案の提案、3) 学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、4) 後輩のファシリテーター育成 を目的として報告と提案をもとに、グループワークを通して各学科 SALC への活かし方について学んだ。参加者:43名(教職員42名、学生1名)。
- 11月11日第35回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会・2019第3回大学人教育力養成講座(対象:全教職員・学生、テーマ:「ベストティーチャーから学ぶ」、話題提供:総合教育センター 岩本晃代先生、薬学科 山口幸輝先生)参加者:13名(教職員9名、学生4名)
- 昨年度ベストティーチング賞受賞者の岩本先生と山口先生から、授業改善のポイント・学生へ向き合う

スタンス・主体的な学びの醸成などについて話題提供していただき、参加者全員でグループワークを通して学んだ。また、この錬成会を通じて、新人の教員の先生に、本学のAPの取組を知っていただくとともに、アクティブ・ラーニングの授業の実例などについて知る機会になったものと思われる。

○令和2年3月9日第36回ファカルティデベロッパー錬成会(対象:全教職員(特に薬学科教職員)・学生、テーマ:「実務実習前後に薬学部5年生に対して実施したPROGテスト結果報告会、話題提供:(株)リアセック キャリア総合研究所主任研究員 石川純一先生)。

APの中間評価に対応するため、学生の主体性の成長を客観的に評価する指針を得るために行ったPROGテストにおいて、知識活用力を示すリテラシーがトップであった薬学科(全国平均スコア4.4に対し5.7)では、主体性を含むコンピテンシーが全国平均スコア3.5に対して2.7と学内最下位であった。この結果を踏まえ、薬学科では学生の主体性の醸成を含むコンピテンシー(経験をもとにした成果につながる行動特性)を向上させるための教育について学ぶ機運が高まり、昨年4年次に受験した学生に、5年次で同じPROGテストを11月に受験させた。その結果、コンピテンシー平均2.7が、1年間で2.94まで向上し、特に自己基礎力に伸びが見られた(データの詳細はII-8に掲載)。このデータを元に、第36回FDer錬成会を開催予定であったが、新型コロナウィルス感染防止対策のため中止した。

これらの取り組みの成果として、各学科やコースから選出されたファカルティデベロッパーやその他の教員(特に新人教員)が、7回の錬成会で、アクティブ・ラーニングの手法の研修と、学生への向き合い方、学生と教員の視点の共有が図られた。

神田外語学院での「学習アドバイジングスキル」研修によって、現在本学に7名の同スキルを身に付けた教員がいるが、今年度「学習アドバイジングスキル」トレーナー研修会が実施され、本学の宝来先生が本スキルのトレーナーとなった。この「学習アドバイジングスキル」トレーナーによって、本学で独自に対話を通して学生の主体性を育む「学習アドバイジングスキル」を研修することが可能となった(学習アドバイジングスキルの詳細はII-8に掲載)。この学内「学習アドバイジングスキル」研修で、対話を通して学生の主体性を育むスキルを多くの本学教員へ身につけてもらうと同時に、県内の協定を結んだ熊本保健科学大学・熊本学園大学の教職員にも普及することができた。さらに、高大接続事業の一環として、高校教員でアクティブ・ラーニングを担当される方々へも研修の門戸を広げたいと考えている。このスキルを身に付けたファカルティデベロッパーとの対話を通して、学生は、授業での課題に対して主体的に取り組むことが可能になるものと思われる。

③5月～3月 高大接続による、アクティブ・ラーナーを7年間で育成するための高校との連携

高大接続による高校3年間と大学4年間による自律学修マインドの醸成をはかるために、本学はバイオ理工系大学であることから、令和元年度は県内のスーパーサイエンスハイスクール(SSH)採択校の県立熊本北高校との連携及び、県内農業高校との連携を図った。熊本北高校については、松下AP推進責任者がSSH運営指導委員に任命されており、8月26日および令和2年2月26日熊本県教育厅関係職員2名、熊本北高校教員8名とでSSH運営指導委員会及び情報交換を行った。また9月9日には熊本県内の農業高校(12校16名)の校長・教頭先生と、本学教職員11名(松下AP推進責任者を含む)で情報交換会を実施し、農業高校からの大学への進学と生徒の成長について情報交換を行った。その対象となった学生の中には、大学院進学者も含まれ、高校と大学の実質的な接続による生徒・学生の教育の重要性を共有できた。

④4月～3月 1年生に導入している「SOJO基礎I・II(必修)」の科目において、キャリア専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施(工学部・情報学部・生物生

命学部・薬学部)。

30年度から新しく1年生に導入された科目「SOJO基礎I・II(必修)」を含む基礎教育課程科目において、キャリア系教員・総合教育センター専任教員及びファカルティデベロッパーの協力で、アクティブ・ラーニングによる講義を実施した(工学部・情報学部・生物生命学部・薬学部)。特に今年度より薬学部の1年生もSOJO基礎I(必修)を受講し、これらの科目では「今週の活動とトップニュース」というポートフォリオを通じて、毎週の行動目標や気になるニュース、学修時間や行動目標に対する到達の振り返りを行い、担当教員がコメントをフィードバックした。これらの取組によって、大学1年の初年次に主体的に学修する癖をつけることにつながるものと思われる。また、その成果として、アクティブ・ラーニング科目の内必修科目の割合が、25年度53%であったのに対し、令和元年度は73%に増大した(令和元年度の目標は70%)。

⑤4月～3月 図書館入退館ゲートシステム及び学生証ICカードにより、学生の図書館利用時間・各科目シラバスに記載済みの参考書や図書館学科推薦図書(指定図書)等を利用した課題の提出状況・指定図書等の貸し出し状況等を解析し、このデータを学科・学年・授業科目ごとに把握し、各科目担当教員にフィードバックすることにより、アクティブ・ラーニングの普及と、自律的学修時間の確保、単位の実質化につなげる(その際、図書館の倫理規定等に留意する)。

平成26年度の図書館利用者数は延べ105,418人であったのに対し、令和元年度の図書館利用者数は延べ109,349人(2/29現在)であった。平成28年度が139,830人であったので減少してしまった。この点は、図書館に設置した全学SALCが当初は多くのアクティブ・ラーニング科目の授業に利用されたため図書館の利用者が増加したが、平成30年10月より、熊本地震からの創造的復興を兼ねてSoLA(Sojo Luminous Auditorium)という講堂を建設し、その中に独自のアクティブ・ラーニング教室を設置したため、図書館内の講義の利用者が減少したためと考える。一方、学生の図書館利用の目的調査では、総利用者数の内、講義に関する資料の利用(自主学修)の割合が、26年度には21%だったのに対し、令和元年度は30%と増加しており、自主学修の学生が増加したものと思われる。

また、個々の利用者の利用時間は、0～30分が22.4%(30年度24.5%)、30～60分が12.4%(同14.5%)、60～90分が14.1%(同16.9%)、90～120分が30.4%(同23.5%)、120分以上が20.7%(同20.6%)であった。全体の図書館利用者数は減少したものの、滞在時間も90分以下が減少し、90～120分が大きく増加している。このことも、講義に関する資料の利用(自主学修)が増大したことと関連していると思われる。これらのことと総合的に評価するために、各々の年度の図書館延べ利用時間をデータから解析し、一人当たりの図書館利用時間を算出したところ、事業開始年度の平成26年度は、一人当たり11.2分の図書館利用時間だったのが、令和元年度には、一人当たり32.2分まで、約3倍に増大した。図書館の利用時間は、まだまだ十分とは言えないが、これまでの取組が利用時間を増大させていることは評価できるので、引き続き全学及び学科SALCの活動を通して、図書館の利用時間のさらなる増大を図りたい。

またさらに、学科別に利用率を分析すると、ナノサイエンス学科と応用生命科学科の学生が、平均一人30回の図書館利用率のところ、各々46回、48回と高い利用率を示した。また上記学科の学年内訳を見るとナノサイエンス学科では1年生の利用回数が高く、応用生命科学科では3年生の利用回数が高かった。今後、これらのデータとアクティブ・ラーニング科目受講者との関連について、さらに調査を行う予定である。その際には、本学の「個人情報保護規程」に留意する。

⑥ 4月～3月 全学 SALC・学科 SALC でのファカルティデベロッパーと学生ファシリテーターによる学生の自律学修支援

また、全学 SALC は学生の自主学習の場としても利用され、平成 26 年度の利用者数延べ 76 人の学生に対し、令和元年度の利用者数延べ 2,840 人と自律学習の促進に寄与したが、学内での周知がまだ十分ではなく、今後さらに利用者を増やす必要がある。また、利用時間は、27 年度が延べ 560 時間だったのに対し、令和元年度は 3,581 時間と大きく増大した。

⑦ 国際交流センターでの留学ファシリテーターの活動と留学支援

令和元年度も、国際交流センターに留学ファシリテーターによる留学相談コーナーを設置し、留学相談会も含め延べ 193 人（30 年度 49 人）の利用者があった。その結果、本学学生の海外留学は、26 年度 22 名だったのに対し、令和元年度は 267 名まで増大している（但し、昨年度が 273 名であったので、新型コロナウィルスの影響があったものと思われる）。この留学生数の増大は、留学経験者の留学ファシリテーターのアドバイスが活かされているものと思われる。また、留学した後の報告会にも多くの学生が参加しており、今後の益々の増加が期待される。

⑧ 2月～3月 学生の学修行動の把握分析と内部及び外部評価委員による評価を通して次年度の本事業に活かす

30 年度は、31 年 3 月 22 日に外部評価委員会（外部評価委員 2 名：田中岳（東京工業大学教育革新センター教授、山崎周一（熊本防錆工業（株）元会長））を開催した。その際の提言として「中間評価を踏まえて、学習アドバイジングスキルの具体的な内容を明示すること。本 AP 事業の取組による学生の主体的学びの達成度の指標を明確にし、その評価を行えるようにすること」等があった。

これを踏まえて、30 年 9 月 25 日の後期オリエンテーション時に、主体性を含む社会人基礎力を評価する「PROG テスト」を全学科 4 年生に対して実施し、令和元年 4 月（新入生）及び 9 月（3 年生）にマイナビ MATCH plus という社会人基礎力（前に踏み出す力・考え方・チームで働く力（全 12 社会人基礎力）の測定を行う外部テストを実施した。その結果、MATCH plus では、社会人基礎力 12 項目の内、全国平均（数万人規模の調査）に比べて、本学入学時には、平均以上の項目が 3 項目であったものが、3 年次後期には 5 項目（働きかけ力・実行力・課題発見力・状況把握力・規律性）に向上したことが示された。また、1 年次と 3 年次で比較した場合、12 項目中 8 項目で向上が見られた（詳細は II-8 で記載）。さらに、30 年度の卒業予定者を対象に学内アンケートを実施した結果、717 名（回答率 92.6%）の内、主体的に学ぶ力が本学で付いた答えた学生が 82.6% に及んだ。次年度は、本事業の発展形として、大学独自の SOJO ポートフォリオを含む教育改革（SEIP-II 改革）が 2 年目を迎える。そのためにも、毎年、4 月（1 年次）、9 月（3 年次）で社会人基礎力を定点観測し、その指標をもとに、本事業及び本学教育改革の PDCA を回していく予定である。

また、これらのデータを元に、令和 2 年 3 月 13 日に令和元年度の外部評価委員会を行う予定であったが、新型コロナウィルス感染防止対策のため中止となった。あらためて、書面資料による外部評価委員会を開催する予定である。

これらの取り組みの成果として、内部及び外部評価委員会による本事業の検証評価により、本事業が客観的に評価され、進捗した点と不十分な点が明確になることが期待できる。事業の P D C A を回すことによって、外部の視点を入れることで、学生にとって真に意味のある事業にできるようになるとともに、教育改革の上で最も重要な、教員の意識改革が行えるものと期待される。

⑨ 2月～3月 次年度新規学生ファシリテーターの育成

AP事業は今年度終了するが、本学予算によって、引き続き学科SALC等での学生の自律学修マインドの醸成を行うため、令和2年3月30日に、次年度学生ファシリテーター研修を行う予定である。これによって、教職員と学生との視点の共有、本大学での取り組みの共有が行え、来年度のファシリテーション業務に活かされるものと思われる。また、これらの取り組みの成果として、個々の学生ファシリテーターが、将来「優れたリーダーシップを持つ学生」として成長するためにプラスになるものと思われる。但し、新型コロナ肺炎の感染防止のため、中止する可能性もある。

⑩ 3月 他のAP採択校への訪問及び熊本近隣大学とのシンポジウムの共同開催

本学のAPの取組が、学士教育課程の根底（入口）にある「自律学修マインドの醸成」にあるに対し、タイプV（卒業時に質保証の取組強化）採択の千歳科学技術大学の取組は、学士教育課程の到達度を評価する「基礎力テスト」の開発に取り組んでいる。両校の取組は、言わばアクティブ・ラーニングの入口と出口に相当するものである。そこで、31年3月28日に、同校を訪問し、意見交換と情報共有をはかった。また、上記の第32回FDer鍊成会は、熊本近隣大学の熊本保健科学大学及び熊本学園大学との連携協定に基づき共催で開催した。テーマは「学習アドバイジングスキルとSALCの活用について」で、グループワークによる学習アドバイジングスキルの研修を行った。これらは「学習アドバイジングスキル」の普及に関するもので、本事業の発信を兼ねている。

さらに、今年度はAP事業の最終年度でもあるため、11月11日にはAP事業北九州合同セミナーに参加し、本学の取組と他のAP採択校（宮崎国際大学・北九州市立大学・山口大学・日本赤十字九州国際看護大学・鹿屋体育大学）（テーマI、テーマII、テーマI・II、テーマVの採択校）との情報交換と共有を行った。また、11月30日には立正大学において、第8回大学教育再生加速プログラム(AP)テーマI選定校協議会に参加し、その後行われた令和元年度大学教育再生加速プログラム(AP)テーマIアクティブ・ラーニングシンポジウムにおいて登壇し、本学のAP事業と教育改革の取組について紹介した。

⑪ 9月～3月 本取組の集大成として「学習アドバイジングスキルを活用した学生の自律学修マインドの育成（仮題）」を出版し、この内容をテーマにして、熊本近隣の大学との共催による成果シンポジウムを開催する。

上記の表題は、「学習アドバイジングスキルガイドブック (1st Ed.)」となり、令和2年3月に発刊する。また令和元年9月13日第32回ファカルティデベロッパー鍊成会・SALCネットの会、並びに2019第2回大学人教育力養成講座（対象：全教職員・学生・熊本保健科学大学教職員・熊本学園大学教職員）において、テーマ「学習アドバイジングスキルとSALC活用について」話題提供：宝来華代子先生（FDer・SILC/SALC）、大嶋康裕先生（FDer・総合教育センター）で、このガイドブックの内容の研修を、他大学の教職員と本学の教員・学生を交えて行った。研修後のアンケート調査では、全員が「とても満足した・満足した」と回答し、実のある研修会であった。参加者：34名。（本学25名（教職員18名、学生7名）、熊本保健科学大学教職員7名、熊本学園大学教職員2名）

上記の成果を、数値目標との関連で下記にまとめ、関連する資料を添付した。

崇城大学 大学教育再生加速プログラム数値目標のまとめ

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1(実績)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目の割合(科目数で算定)	8.2%(導入科目数75/総科目数915)	12.2%(112/915)	18% (165/915)	20%(178/915)	21% (188/915)	23% (207/915)	26%(239/915) (25%)
今回の事業により導入するアクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目的割合	53%(40科目/75科目)	60%	59% (97/165)	61% (109/178)	63% (119/188)	68% (141/207)	73% (175/239) (70%)
学生一人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	0.87科目(延べ2848人/在籍者数3266人)	1.5科目		3.7科目(延べ13140人/在籍者数3569人)	4.0科目(延べ14198人/在籍者数3586人)	4.5科目(延べ16164人/在籍者数3622人)	4.8科目(延べ17672人/3676人) (2.2科目)
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2% 1182人/2453人(1~3年(葉は5年))	58.7% 1518人/2586人	79.1% 2155人/2725人	92.9% 2545人/2739人	95.3% 2602人/2729人	100% 2746人/2746人	100% 2852人/2852人 (100%)
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数(%)	25.9% 64人/247人	35.6% 89人/250人	41.2% 103人/250人	52.8% 132人/250人		66.8% 167人/250人	72.8% 182人/250人 (60%)
学生一人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	約2時間/週	2.3時間/週		5.0時間/週 (生命1・2年) (情報1・2年)	5.0時間/週 (生命1・2年) (情報1・2年)	5.2時間/週 (生命1・2年) (情報1・2年)	5.1時間/週 (生命1・2年) 6.5時間/週 (情報1・2年) (4時間/週)
ファカルティデベロッパー数	0人	16名	16名	17人(総合教育3名+学科14名)	18人(総合教育4名+学科14名)	20人(総合教育4名+学科16名)	24人 (23人)
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	0人	延べ39人	延べ158人	120人 (実数)	167人 (実数)		210人(実数) (23人)
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	約200人/3266人 [(約5人/1学科・1学年) × (10学科・4学年)]	289人		911人	899人	982人	941人 (900人)
学生ファシリテーター養成数	0人	17人	19人	38人	41人	36人	43人
留学ファシリテーター養成数	0人	5人	6人	12人	12人	9人	9人
全学・学科SALC利用者数	0人	76人	1119人	1832人	1811人	1967人	2840人
全学・学科SALCでの自律学修時間	0時間	延べ111時間	延べ560時間	延べ1643時間	延べ1698時間	延べ3963時間	延べ3581時間
図書館利用者数	延べ104202人	延べ105418人	延べ121806人	延べ139830人	延べ130217人	延べ123416人	延べ109349人
図書館利用者の内、講義に関する資料の利用目的		約21%		約21%	約26%	約23%	約30%
図書館利用時間 0~30分		24.4%	23.6%	33.8%	28.6%	24.5%	22.4%
図書館利用時間 30~60分		14.9%	14.8%	16.7%	15.4%	14.5%	12.4%
図書館利用時間 60~90分		17.9%	17.5%	12.7%	14.4%	16.9%	14.1%
図書館利用時間 90~120分		18.8%	22.3%	20.2%	23.0%	23.5%	30.4%
図書館利用時間 120分以上		24.0%	21.7%	18.6%	18.5%	20.6%	20.7%
図書館延べ利用時間		19681時間	51531時間	54794時間	57915時間	61597時間	58639時間
図書館の平均利用時間		11.2分/人	25.4分/人	23.5分/人	26.7分/人	30分/人	32.2分/人

2018年3月末 2019年3月8日 2020年2月29日
(当初目標値)

令和1年度の図書館利用状況

学科名	合計[回]	在籍人数	利用率(回/人)
機械工学科	8819	336	26
ナノサイエンス学科	10635	229	46
建築学科	10420	349	30
宇宙航空システム工学科	10156	350	29
美術学科	1138	102	11
デザイン学科	1379	155	9
情報学科	18975	634	30
応用微生物工学科	10277	300	34
応用生命科学科	18581	387	48
薬学科	18969	834	23
合計	109349	3676	平均 30

高利用学科の学年内訳

ナノサイエンス学科 1年生	4326
ナノサイエンス学科 2年生	4165
ナノサイエンス学科 3年生	1302
ナノサイエンス学科 4年生	842
応用生命科学科 1年生	5365
応用生命科学科 2年生	4140
応用生命科学科 3年生	8003
応用生命科学科 4年生	1073

崇城大学の大学教育再生加速プログラムの取り組みとその成果

アクティブ・ラーニングの基礎となる自律学修マインドの醸成

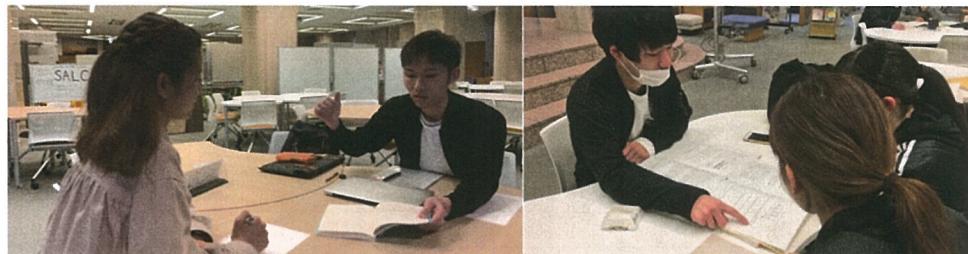
松下琢・大嶋康裕

崇城大学

1. 取組の概要

本学では、グローバル技術者育成を目指し、平成22年度より15名に及ぶネイティブ教員による英語教育施設(SILC)を立ち上げた。また同時にアクティブ・ラーニングのためのSelf-Access Learning Center (SALC)を設置して教員を配置し、独自の英語教育自律学修プログラムを構築してきた。全学学生数約3,500人の内、SALC利用者数は4年後の平成25年には、当初の12倍の約18,000人/年まで増大し、学生の自律学修マインド育成に貢献してきた。そこで本事業では、このSALCで培ったノウハウを全学に普及させるために、①本学アクティブ・ラーニング及び自律学修の拠点となる全学SALC及び学科SALCを設置した。

②SILC/SALCで用いられている対話を通じて学生の主体的な学びを醸成する学習アドバイジングスキルを身に付けたファカルティーデベロッパーと学生ファシリテーターを養成し、全学SALC及び学科SALCでの学生の自律学修を促した(写真1)。③各基礎科目・専門科目で自律学修が可能なSALCアクティビティーを開発し、その学習成果を成績に反映させた。④各科目で図書館の学科推薦図書を活用した課題を課すとともに、学生証をICカード化し、図書館の入退館システムと連動させて、各専門科目の講義と図書館利用を連携させ、図書館の利用時間を可視化した。以上をもって、学生の自律学修マインドを醸成し、かつ単位の実質化をはかるのが、本取組の目的である。



全学SALCにおける学生FCによる自律学修指導

(総合教育センター 左:数学、右:物理)



学科SALCにおける生命FDerによる自律学修指導
(応用生命科学科)



全学SALCにおける教職サークルによる自律学修指導

写真1 全学SALC・学科SALCにおける学生の自律学修の様子

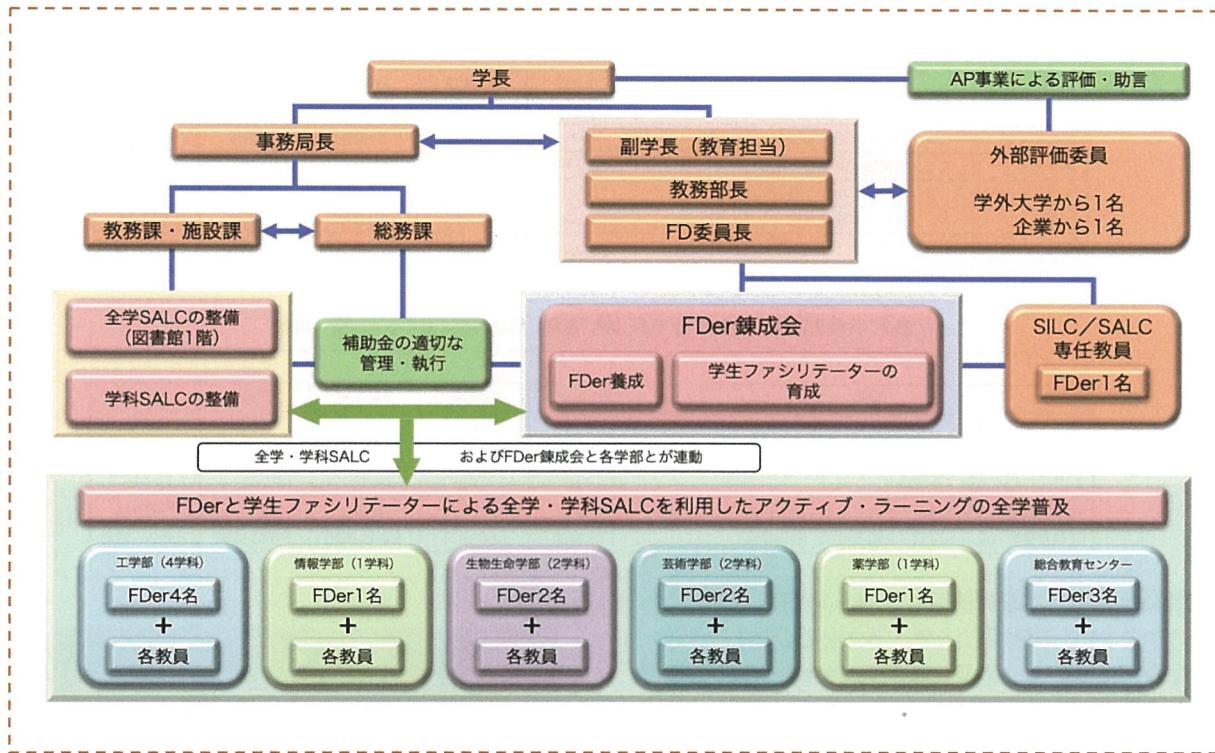


図1 崇城大学教育再生加速プログラム（テーマI：アクティブ・ラーニング）実施体制

2. 進捗・成果

【学内の実施体制】平成27年度より、学内に、教務部長・FD委員長・事務局長・教務課・総務課・図書課・広報課・ファカルティーデベロッパー(FDer)などからなるAP運営委員会を立ち上げ、計画の実施状況、補助金の執行状況等について検討しながら事業を進行した(図1)。また、本学の中長期計画の「教育力の向上」と本事業のかかわりに関しては、学内の崇城大学教育刷新プロジェクト会議(SEIP-II会議)において、その整合性が取れるように管理を行った。また、実際の事業計画の詳細は、FDerが就任しているFD委員会を毎月開催し、検討・実施した。なお、本事業の進捗状況を適切に評価するために、外部評価委員として大学及び企業から2名に依頼した。卒業生の多くが就職している地場企業「熊本防錆工業(株)」取締役会長の山崎周一氏、及び九州地域大学教育改善FD・SDネットワークから田中岳先生(現在、東京工業大学教育革新センター)に参画していただき、事業評価を実施した。

【中心となる取組】本学アクティブ・ラーニング(AL)の拠点となる全学SALC及び学科SALCを全学科に設置した。このSALCや既存の講義室を活用し、各学科から選抜されたFDerを中心にALの講義を実施し

た。また、学生との対話を通じて学生の自律学修マインドを醸成する「学習アドバイジングスキル」をFDerに身に付けさせるためのFDer鍛成会を2か月に1回開催するとともに、このスキルの講習会を実施している神田外語大学にFDerを派遣し研修を行った。上記SEIP-IIでは、シラバスを見直し、各教科に多面的評価を導入するとともに、各教科の中でのSALCアクティビティーや図書館の学科推薦図書を指定した課題の提出を評価に加えた。各SALCにはFDerと学生ファシリテーター(FC)が曜日と時間を決めて駐在し、これらの課題の学修相談にのるようにした。さらに、図書館の入退館システムの導入による図書館滞在時間と各SALCの利用時間をモニターすることによって、単位の実質化を図った。

【取組の成果】本事業による各学科SALCができることによって、学生のSALC利用者数・利用時間が、平成26年度:76人・延べ111時間が、平成30年度:1,879人・延べ2,991時間と増大した。また、図書館の利用者数も平成26年度(105,418人)が平成30年度(123,416人)に増大した(表2)。さらに、学生の中から自発的に自律学修サークルが立ち上がった。また、全学SALC・学科SALCの活動状況や課題を共有するために、学生FCらによる「SALCネットの会」を結成した。このSALCネットの会は、月に2回程度の

表1 大学教育再生加速プログラム（AP）事業 必須指標に対する達成度（実績）

項目	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合	12.2%	18.0%	20.0%	21.0%	23.0%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合	60.0%	59.0%	61.0%	63.0%	68.0%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	58.7%	79.0%	92.9%	95.3%	100.0%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	1.5科目	1.5科目	3.7科目	4.0科目	4.5科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数（割合）	35.6%	41.2%	52.8%	63.2%	66.8%
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間（1週間当たり）	2.3時間	2.3時間	5.0時間	5.0時間	5.0時間

表2 大学教育再生加速プログラム（AP）事業 独自指標に対する達成度（実績）

項目	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
アクティブ・ラーニングに関するFD受講者数	16人	16人	120人	167人	220人
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数	289人	733人	911人	899人	982人
図書館の利用者数（年間延べ）	105,418人	121,806人	139,830人	130,217人	123,416人
自律学修室（全学SALC・学科SALC）利用者数	76人	1,119人	1,832人	1,811人	1,879人
自律学修室（全学SALC・学科SALC）利用時間	111時間	560時間	1,643時間	1,698時間	2,990.5時間

報告会をFDerや教務課職員と一緒に開催しており、その中でSALCの活用方法や、学生を呼び込むための方法などについて、意見交換をしている。学生の視点からの提言が、FDerの学習アドバイジング研修にも有効であり、このSALCネットの会がFDer鍛成会の役割を持つつある（写真2）。



応用微生物工学科学生FCによる活動事例紹介

写真2 学生FCによる活動事例紹介

また、神田外語大学での「学習アドバイジングスキル」講習会には、平成29年度3名が参加し、延べ7名となった。さらに令和元年度には、この「学習アドバイジングスキル」講習会を学内で実施できるトレーナー1名の養成を行ったので、今後は独自に本学で「学習アドバイジングスキル」講習会を開催することが可能となった（写真3）。

また、本事業の取組は、平成30年度より崇城大学教育刷新プログラム（SEIP-II）に独自に発展し、全学の科目的シラバスに記載されている学修到達度目標に対して、学生がどの程度目標が達成されたかを振り返る学修到達度ポートフォリオ（科目的学修到達度レポート）を実施することとなった。このポートフォリオは、コンピューター上で学生の自宅からでも行える



学内トレーナーによる学習アドバイジングスキルの概略説明

（AP特別講演会 2019年9月13日）

写真3 学習アドバイジングスキルの学内トレーナー

ようにし、最終的に、科目的評価点に結びつけることが全学的に決定している。また、シラバスの成績評価方法の記載欄には、中間試験・レポート・小テスト・成果発表など、これまでの定期試験のみによる評価から、多面的な成績の評価を行うように改訂している。これらの教育改革を、「学生の自律学修マインドを醸成する」本AP事業と連動させることによって、「学生が何を学んだかではなく、何ができるようになったか」を常に振り返り、学生の主体的な学びを育むことを目指す。このSOJOポートフォリオの講演会を学内外に呼び掛けて平成30年3月26日に行なったところ、学内83名、学外52名（久留米大、福岡歯科大、熊本学園大、中京大、佐賀大、石川県立大、八戸工業大、福岡工業大、芝浦工業大、明石高専、函館高専、熊本大、九州ルーテル学院大、熊本県立八代高校、熊本保健科学大、茨城大、九州工業大等）の参加があった。

3. 今後の展望

本学では、学生の主体的な学びを支援するために、本AP事業も含め様々な取組を行っている。その中で、ベンチャーマインドの育成の取組では、本学の学生チームが、内閣府・文部科学省・経産省後援の「キャンパス・ベンチャーグランプリ 2017 全国大会」テクノロジー部門において文部科学大臣賞（グランプリ）を受賞した。その販売事業は「焼酎粕を利用した光合成細菌の培養キットの開発・販売」で、東南アジア地域でのエビへの養殖にも有効であり、海外への事業展開も目指して、SILCとSALCの英語教育施設を活用してコンテンツを英語に直し、文部科学省・外務省・米国大使館が後援する第6回全国学生英語プレゼンテーションコンテストで発表した。その結果、「2017年度最優秀賞・文部科学大臣賞」を受賞し、日本一となった。これらの受賞は、本学の学生の主体的な学びが醸成された成果の一つと考えられる。

また、教員採用試験の現役合格を目指す自律学修サークル「教職サークル」が、全学SALCを活用して、平成27年度より立ち上がったが、平成28年度・平成29年度・平成30年度と連続して、教員採用試験の現役合格者を輩出している。本学には教育学部はない中で、学生が主体的に学んだ成果の一つと考えられる（写真4）。



現役教員や学生を前に模擬授業を行う教職サークル学生

写真4 本学卒業生の現役教員を招いた教職サークルの活動

さらに本学では、学生が自ら何かにチャレンジして、成果を上げた者に対して、平成26年度より学長表彰（笑顔と感謝の表彰制度）を設けている。建学の精神「体・徳・智」に基づく、SOJOパワー賞・SOJOスピリッツ賞・SOJOブレイン賞の三つの賞に、平成30年度は674名（在学生数：約3,600名）が受賞した。毎年、在学生の約20%が学長賞を受賞しており、これも、全学で、学生の主体性が育まれている成果と考えられる。

これらの取組も含めて、学生の自律学修マインドの醸成について、平成30年に全学的なアンケートを実施するとともに外部試験を活用し、「学生の主体的学

びの達成度の指標」の明確化を試みた。外部試験としては社会人基礎力を評価するPROGテストやMATCH PLUSといったテストを1年生と3年生に行い、リテラシーやコンピテンシーなどの学科毎の違いや、本学の学生の主体性が、全国レベルでどの程度育まれているかの評価・検証を開始している。今後この評価・検証結果を踏まえ、AP事業のPDCAを回していく予定である。

また、熊本地震によって被災した学内の建物の創造的復興に伴い、「アクティブ・ラーニング教室（152名収容）」を新たに設置することや、各学生が学修の振り返りを行う「学修到達度ポートフォリオ」の全教科目への導入など、全学的に本事業の成果を本学独自の教育改革に発展させ、全学的な学士課程教育の実質化・質保証を継続的・組織的に目指していく所存である。

II – 2. 全学のアクティブ・ラーニング取り組み調査結果

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたりーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
総合教育センター	<p>①基礎物理学・学科により必修もしくは選択・町田光男 上野賢仁 天本徳浩 板橋克美 福島和洋・1・500・0 ②物理学・学科により必修もしくは選択・町田光男 上野賢仁 天本徳浩 板橋克美 福島和洋・1・450・0 ③物理学実験・学科により必修もしくは選択・町田光男 上野賢仁 天本徳浩 池田達裕・2・185・0 ④中国語圏の文化と社会・必修選択・单援朝・1・13・0</p>	<p>⑤アントレプレナーシップ入門・選択・中島厚秀 田口雄太・1年・54・0 ⑥SOJO基礎 I / ⑦SOJO基礎 II / ⑧SOJO基礎(薬学)・必修・辻田祐純 藤本元啓 石倉恵介 今井亮佑 岩本晃代 王雪 木村勝美 阪本達也 水月晃 鈴木俊洋 園部博範 田口雄太 竹内明里 富田健之 中島厚秀 増村雅尚 宮崎昭次 山本康詞 田上寛美 藤田崇・1年・630・0 ⑨キャリア基礎II・必修・辻田祐純 藤本元啓 石倉恵介 今井亮佑 岩本晃代 王雪 木村勝美 阪本達也 水月晃 鈴木俊洋 園部博範 田口雄太 竹内明里 富田健之 増村雅尚 宮崎昭次 山本康詞 田上寛美 藤田崇・2年・630・0 ⑩キャリア基礎III・必修・辻田祐純 藤本元啓 田上寛美 藤田崇・3年・530・0 ⑪キャリア実践I(3機)・必修・辻田祐純 藤本元啓 田上寛美 藤田崇・3年・88・0 ⑫キャリア実践II(3機)・必修・辻田祐純 藤本元啓 田上寛美 藤田崇・3年・76・0 ⑬キャリアデザイン I / ⑭キャリアデザインII(3美デ)・必修・辻田祐純 藤田崇・3年・48・0 ⑮英語1 / ⑯英語2・SILC教員・1年・全学年800人・0 ⑰英語3 / ⑱英語4・SILC教員・2年・全学年800人・0</p>	<p>⑯ベンチャービジネス・選択・中島厚秀 田口雄太・1年・152人・34人 (※優れたりーダーシップを持つ学生の数は、第6回崇城大学ビジネスプランコンテストへ授業「ベンチャービジネス」内からエントリーしたチーム数より算出) ⑰イノベーション論I・選択・中島厚秀 王雪・2年・265人・0人 ⑱イノベーション論II・選択・中島厚秀 王雪・2年・56人・15人 (※優れたりーダーシップを持つ学生の数は、第6回崇城大学ビジネスプランコンテストへ授業「イノベーション論 II」内からエントリーしたチーム数より算出)</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
ナノサイエンス 学科	<p>①化学実験操作法(必修・草壁克己・西田正志・1年・58名・10名) ②環境生物科学実験(必修・迫口明浩・田丸俊一・櫻木美菜・1年・61名・10名) ③環境物質科学実験(必修・池永和敏・西田正志・2年・44名・10名) ④素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・44名・10名) ⑤素材科学実験II(必修・八田泰三・水城圭司・2年・44名・10名) ⑥素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・44名・10名) ⑦生化学実験(必修・田丸俊一・3年・49名・10名) ⑧プロセス工学実験(必修・草壁克己・迫口明浩・櫻木美菜・3年・49名・10名) ⑨化学II演習(必修・友重竜一・田丸俊一・水城圭司・1年・61名・10名) ⑩無機化学(必修・井野川人姿・2年・45名・10名) ⑪材料組織学(選択・友重竜一・2年生・42名・10名) ⑫コンピュータ科学(選択・迫口明浩・2年生・44名・10名) ⑬機能性高分子科学(選択・黒岩敬太・3年生・42名・10名)</p>	<p>⑭化学II(必修・友重竜一担当部分)・1年・61名・10名) ⑮化学II演習(必修・友重竜一・田丸俊一・水城圭司・1年・61名・10名) ⑯素材科学実験I(必修・友重竜一・井野川人姿・2年・44名・10名) ⑰素材科学実験III(必修・黒岩敬太・米村弘明・2年・44名・10名) ⑱生化学実験(必修・田丸俊一・3年・49名・10名) ⑲ナノサイエンス入門(必修・全員・1年・62名・10名) ⑳無機化学(必修・井野川人姿・2年・60名・10名) ㉑ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・46名・10名) ㉒学外実習(必修・池永和敏・黒岩敬太・3年・50名・10名) ㉓技術者の基礎知識(必修・鈴木俊洋・3年・48名・10名) ㉔環境物質科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ㉕産業と生活環境科学(選択・池永和敏・2年・60名・10名) ㉖材料組織学(選択・友重竜一・2年生・42名・5名) ㉗特別活動IV(選択・草壁克己・3年・50名・10名)</p>	<p>㉘化学II演習(必修・友重竜一・田丸俊一・水城圭司・1年・61名・10名) ㉙ナノサイエンス演習(必修・ナノサイエンス学科教員12名(3年・46名・10名) ㉚学外実習(必修・池永和敏・黒岩敬太・3年・50名・10名) ㉛専門英語I(選択・水城圭司・3年・50名・10名) ㉜特別活動IV(選択・草壁克己・3年・50名・10名)</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
建築学科	<p>①【科目名】アーキワーク I 【必修選択】必修 【教員名】村田、内丸、東 【学年】1年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>②【科目名】アーキワーク II 【必修選択】必修 【教員名】村田、西郷、本保、島津 【学年】1年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>③【科目名】アーキワーク III 【必修選択】必修 【教員名】秋元、村田、島津、赤星、原田 【学年】2年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>④【科目名】アーキワーク IV 【必修選択】必修 【教員名】内丸、村上、松茂良、赤星 【学年】2年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑦【科目名】建築設計 I 【必修選択】必修 【教員名】古賀、秋元、本保、中村 【学年】1年 【受講人数】94名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑧【科目名】建築設計 II 【必修選択】必修 【教員名】秋元、西郷、中村、林田、村田、赤星 【学年】1年 【受講人数】94名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑨【科目名】建築設計 III 【必修選択】必修 【教員名】西郷、内丸、本保、林田、村上、村田、松茂良、赤星 【学年】2年 【受講人数】94名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑩【科目名】建築設計 IV 【必修選択】必修 【教員名】本保、内田、西山、森 【学年】2年 【受講人数】94名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑪【科目名】建築意匠設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】内田 【学年】3年 【受講人数】35名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑫【科目名】建築設備設計 【必修選択】選択(建築計画コース選択必修) 【教員名】村田、木村 【学年】3年 【受講人数】35名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	<p>⑯【科目名】地域計画設計 【必修選択】選択(建築計画コース必修) 【教員名】内丸、森下 【学年】3年 【受講人数】26名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】12名</p>

建築学科	<p>⑤【科目名】建築史Ⅰ 【必修選択】必修 【教員名】内丸、原田 【学年】2年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑥【科目名】建築史Ⅱ 【必修選択】必修 【教員名】内丸 【学年】2年 【受講人数】100名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑬【科目名】建築構造設計 【必修選択】選択(建築構造コース必修) 【教員名】東、川島 【学年】3年 【受講人数】35名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑭【科目名】デザイン実習Ⅰ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】90名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑮【科目名】デザイン実習Ⅱ 【必修選択】選択 【教員名】星加 【学年】1年 【受講人数】30名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑯【科目名】デザイン実習Ⅲ 【必修選択】選択 【教員名】西郷 【学年】2年 【受講人数】15名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p> <p>⑰【科目名】建築構造実験 【必修選択】選択(建築構造コース必修) 【教員名】島津、松茂良、東、赤星 【学年】2年 【受講人数】16名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】10名</p> <p>⑱【科目名】建築ゼミ 【必修選択】必修 【教員名】常勤全教員 【学年】3年 【受講人数】83名 【優れたリーダーシップを持つ学生の養成数】0名</p>	
------	--	--

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。 講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。 物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
宇宙航空システム工学科	<p>①航空法規 I (操縦)／選択／久次米／1年／20名／0名 ②航空機システム基礎(操縦)／選択／久次米／1年／20名／0名 ③航空宇宙工学・実験 I (シス): 選択、金澤・甲斐・小林・白石・谷・堤、2年、33人 ④航空宇宙工学・実験 II (シス): 選択、白石・甲斐・谷・堤、3年、47人 ⑤航空機検査概説(3整)/選択/岩崎/3年/24人/24人 ⑥航空宇宙工学・演習 II (整備学)/選択/河野・菊池・杉本/3年/24人/24人 ⑦航空宇宙工学・演習 III (整備学)/選択/河野・杉本・菊池/3年/24人/24人</p>	<p>⑧航空宇宙工学・演習I:選択、小林・千馬・1年・59人・0 ⑨航空宇宙工学・演習II:選択、小林・千馬・2年・35人・0 ⑩航空宇宙工学・演習III:選択、小林健児・千馬浩充・3年・16人・0 ⑪宇宙推進工学:選択、小林健児・3年・40人・0 ⑫航空宇宙機設計論:選択、岡本博之、3年・30人 ⑬航空宇宙工学特別講義 II :選択、谷泰寛、3年・26名・0名 ⑭航空機システム・実習 II (整備学)/選択/河野・宮元・矢島・内布・杉本/3年/23人/6人</p>	<p>⑮誘導制御 I 選択 橋本毅・2年 25名/0</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
情報学科	<p>①ものづくり教室／選択／青木、柿木、吉岡／1年／70名／5名／ ②電子情報基礎実験／選必／杉浦、池田、西嶋／2年／42名／12名／ ③情報通信実験／選必／吉岡、山路、池田／3年／43名／6名／ ④情報処理基礎A／必修／斎藤／1年／87名／2名／ ⑤情報処理基礎B／必修／斎藤／1年／90名／4名／ ⑥電気回路入門／必修／西嶋／1年／168人／10名 ⑦電気回路IA／選必／西嶋／1年／56人／2名 ⑧電気回路IB／選必／西嶋／1年／62人／2名 ⑨情報工学基礎実験／選必／木村、筒口、岡本／2年／140人／14人 ⑩伝送工学／選択／山路／3年／45人／0人 ⑪電磁波工学／選択／山路／3年／45人／0人</p>	<p>⑫電磁気学Ⅱ／選必／池田／2年／30名／10名／ ⑬メディアコンテンツ制作入門／選択／星合、植村、非常勤講師3名／2年／61名／6名／ ⑭ヒューマンインターフェース／選択／木村／3年／38名／6名／ ⑮電磁気学I／選択／青木／1年／38名／7名／ ⑯情報と職業／選択／川本／2年／121名／9名</p>	<p>⑰ソフトウェアエンジニアリング入門／選必／星合／2年／94名／10名／ ⑲メディアコンテンツ制作演習／選択／星合、植村、内藤、非常勤講師3名／2年／71名／12名／</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
応用微生物工学科	<p>①「応用微生物学実験」(必修) (原島、岡、浴野)(1-2年)(78名)(10名) ②「生物化学実験」(必修)(安藤、松元)(2年)(80名)(10名) ③「食品生物科学実験」(必修) (寺本、三枝)(3年)(80名)(10名) ④「生物資源環境工学実験」(必修)、(松岡、長濱、中山)(3年)(80名)(10名) ⑤「微生物遺伝学実験」(必修) (田口、笹野)(2年)(80名)(10名) ⑥「分析化学実験」(必修)(西園)(1年)(80名)(10名) ⑦「化学I」(必修)(中山)(1年)(70名)(0名) ⑧「バイオテクノロジー総論I」(必修選択)(浴野)(3年)(40名)(5名) ⑨「バイオテクノロジー総論II」(必修選択)(浴野)(3年)(40名)(5名)</p>	<p>⑩「環境保全工学」(選択) (長濱)(2年)(68名)(10名) ⑪「化学工学」(選択)(長濱)(2年27名)(10名) ⑫「食品分析学」(選択)(太田)(3年)(26名)(0名)</p>	

応用生命科学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
応用生命科学科	<p>①科目：生化学Ⅱ(前期) 必修選択：必修科目 教員名：武谷浩之 学年：2年、受講人数：89名 授業内容：半反転授業 ②科目：分子生物学(前期) 必修選択：必修科目 教員名：武谷浩之 学年：2年、受講人数：89名 授業内容：半反転授業 ③科目：遺伝子科学(後期) 必修選択：選択科目 教員名：武谷浩之 学年：2年、受講人数：75名 授業内容：半反転授業 ④生命情報科学実験I ・必修科目・教員名：進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年：2年生・受講人数：7,8人の12グループ・リーダーシップ：12名(グループ1名) ⑤生命情報科学実験II ・必修科目・教員名：進、齋田、武谷、千々岩、宮原・学年：3年生・受講人数：8～9人の12グループ・リーダーシップ：12名(グループ1名) ⑥医用生体工学実験 ・必修科目・教員名：松本、松下、後藤、市原、古水・学年：3年生・受講人数：6,7人の16グループ・リーダーシップ：32名(グループ2名) ⑦生命環境科学実験 ・必修科目・教員名：千々岩、西山孝、平大輔・学年：3年生・受講人数：8,9人グループ×12 ・リーダーシップ：0名 ⑧細胞工学実験 必修科目・教員名：宮坂均、山本進二郎、林修平・学年：3年生・受講人数：3、4名のグループ×24・リーダーシップ：0名 ⑨基礎生命科学 I ①(有機化学) ・必修科目 ・教員名：古水 ・学年：1年、授業人数：85名 ・リーダー0名 ⑩医用工学 ・選択科目 ・教員名：松下琢、山田佳央 ・学年：2年生、授業人数：47名 ・リーダーシップ：0名</p>	<p>⑪科目：生理活性物質(後期) 必修選択の区分：選択科目 教員名：齋田哲也 学年：3年 受講人数：70名 優れたリーダー：7 授業内容：PBL ⑫科目：自然共生人類学 必修選択の区分：選択科目 教員名：松下、古水 学年：1年 受講人数：85名 リーダーシップ：21名 ⑬科目：基礎生命科学V(薬学基礎)(前期) 必修選択の区分：必修科目 教員名：齋田哲也 学年：3年 受講人数：100名 ⑭科目：細胞機能学(前期) 必修選択：選択 教員名：山本進二郎 学年：3年 受講者数：70名 授業内容：PBL リーダーシップ：1名</p>	

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたりーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
美術学科		<p>美術学科の実習科目は学生同士というのではなく学生自身が出された課題を学生個人で主体的に制作していく。理論系の科目も基本学生個人主体によるもの。</p> <p>R1年度実施 1年(選択必修)</p> <p>①-②日本画実習ⅠA・B 中村・佐藤・田淵 (非):各11人 ③-④洋画実習ⅠA・B 熊谷・下城・古澤(非):各10人 ⑤-⑥彫刻実習ⅠA・B 清島:各2人、 ⑦-⑧美術史基礎演習Ⅰ・Ⅱ 関根・永田:3人 ⑨-⑩視覚造形実習ⅠA・B 永田・三枝・林・ 勝野・野島(泉)・野島(マ)2人 ⑪-⑫視覚造形演習ⅠA・B 永田:各2人 ⑬-⑭日本画実習ⅡA・B 中村・佐藤:各3人 ⑮-⑯洋画実習ⅡA・B 熊谷・下城・上野(非):各10人 ⑰-⑲彫刻実習ⅡA・B 清島:各2人 ⑳芸術学演習Ⅰ 永田:3人 ㉑芸術学演習Ⅱ 関根:4人 ㉒デザイン表現演習Ⅱ 永田:2人 ㉓西洋美術史特論Ⅰ 関根:1人、 ㉔日本・東洋美術史特論Ⅰ 永田:3人 ㉕日本・東洋美術史特論Ⅱ 永田:2人 ㉖日本文化特論(近代) 永田:2人 ㉗日本画実習ⅢA・B 中村・佐藤:各11人 ㉘日本画実習ⅣA・B 中村・佐藤:各9人 ㉙洋画実習ⅢA・B 熊谷:13人 ㉚洋画実習ⅣA・B 熊谷:12人 ㉛彫刻実習ⅢA・B-ⅣA 勝野:各1人 ㉜彫刻実習ⅣB 勝野:2人 ㉝宗教芸術・文化Ⅱ(アジア) 永田:2人 ㉞宗教芸術・文化Ⅰ(ヨーロッパ・日本) 関根:2名 ㉟考古学と文化財Ⅰ(考古・発掘) 関根:2名 ㉟芸術文化演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 関根:各2名 ㉟地域文化特論(九州) 関根:3名 ㉟-㉟視覚造形実習Ⅲ-Ⅳ 永田・野島(マ)、 野島(泉):各2人 ㉟美術概論 永田:26名 ㉟アートマネージメント論 永田:3名 ㉟特別演習(日本画) 中村・佐藤:10人 ㉟特別演習(洋画) 熊谷・下城:17人 ㉟特別演習(彫刻) 勝野・清島:1人 ㉟特別演習(芸文) 関根:2人 ㉟博物館実習 関根:13名</p>	<p>美術学科展は学生が主導的に実施し、協働作業で展示を行い、展覧会を実現する上ではこのタイプに属するものであろう。(毎年、前期中に開催)</p> <p>R1年度実施 1~4年(全学年美術学科全員) ・美術学科展学科展(7月開催)、学科行事</p> <p>3年必修科目</p> <p>㉓学外演習(視覚芸術) 3人【*プラザ図書館における「よりみち展」2019・11・17-11・24】</p> <p>3年選択必修科目(芸術文化コース)</p> <p>㉔ワークショップ演習(通年) 永田:6人 【※テクノファンタジーおよびよりみち展におけるワークショップ実施】</p> <p>㉕視覚造形実習Ⅲ(美3前) 永田・野島(泉)(非)・野島マ(非):4人 【※実習における学生主体の企画による「ごみプロジェクト」 2019. 6月開催。】</p> <p>㉖視覚造形実習Ⅳ 永田・野島(泉)(非)・野島マ(非):4人 【※2/14開催のThe 3rd Floor 研究実習棟を利用した展覧会と学生によるプレゼンを開催。】</p> <p>㉗芸術文化演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 関根:各2名 ㉘博物館実習 関根:13名 ㉙学外演習(芸術文化) 関根:2名 ㉚学外演習(視覚芸術) 永田:3人</p>

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(0でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。 講師が主導的に進行。学生がチームを作つて「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。 物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
デザイン学科	<p>1年</p> <p>①■プロダクトデザイン基礎 飯田・原田 11人 選択</p> <p>②■コンピュータ基礎実習 三枝・木下 44人 選必</p> <p>③■デザイン基礎実習 I 飯田・原田 44人 必修</p> <p>④■デジタルデザイン技法 原田・木下 44人 選択</p> <p>⑤■デザイン基礎実習 II 森野・甲野 44人 必修</p> <p>⑥■デザイン技法(写真) 甲野 44人 選択</p> <p>⑦■グラフィックデザイン基礎 岩上・三枝 20人 選択</p> <p>⑧■マンガ表現基礎 小川・木下 13人 選択</p> <p>⑨■色彩構成基礎 星加 44人 選択</p>	<p>すべて必修</p> <p>⑩■デザインプロジェクト I 1年生44人、 ⑪■デザインプロジェクト II 1年生44人、 ⑫■プロジェクト実習 I 2年生40人、 ⑬■プロジェクト実習 II 2年生40人、 ⑭■デザイン総合演習 I 3年生35人 ⑮■デザイン総合演習 II 3年生35人 デザイン学科教員全員8人 各プロジェクトでリーダー、副リーダーでプロジェクトを進めていく。8~16グループでリーダー育成8~16人、副リーダー育成8~16人</p>	
	<p>2年</p> <p>⑯■デザイン発想論演習 本間 35人 選択</p> <p>⑰■生活環境デザイン実習 I 本間・飯田 6人 コース選必</p> <p>⑱■グラフィックデザイン実習 森野 20人 コース選必</p> <p>⑲■生活環境デザイン実習 II 原田・本間 4人 コース選必</p> <p>⑳■メディアデザイン実習 甲野 20人 コース選必</p> <p>㉑■情報デザイン論演習 森野 20人 選択</p> <p>㉒■造形材料論演習 飯田 4人 コース選必</p> <p>㉓■色彩論演習 大森 30人 選必</p> <p>㉔■デザインビジネス論演習 飯田・岩上 20人 コース選必</p> <p>㉕■マンガ表現演習 I 木下・岩田 20人 コース選必</p> <p>㉖■マンガ表現演習 II 木下・岩田 15人 コース選必</p> <p>㉗■脚本ストーリー演習 木下・岩田 15人 コース選必</p>		

デザイン学科	<p>3年</p> <p>②2■空間デザイン実習 原田 7人 コース選必</p> <p>②3■コンテンツ制作実習 甲野 20人 コース選必</p> <p>②4■総合造形実習 三枝 20人 選択</p> <p>②5■プロダクトデザイン実習Ⅰ 飯田 7人 コース選必</p> <p>②6■広告デザイン実習 岩上 20人 コース選必</p> <p>②7■アートクリエイション実習 三枝 10人 選択</p> <p>②8■環境デザイン実習 原田 7人 コース選必</p> <p>②9■クロスメディア総合実習 森野 10人 選択</p> <p>③0■イラストレーション実習 小川 20人 選択</p> <p>③1■プロダクトデザイン実習Ⅱ 飯田 7人 コース選必</p> <p>③2■マンガ表現演習3 小川・木下 20人 コース選必</p> <p>③3■マンガ表現演習4 小川 20人 コース選必</p> <p>③4■デザインストラテジー 森野 20人 選択</p>	
--------	--	--

各学科のアクティブラーニング実施状況調査(令和元年度)

下記の各アクティブラーニング分類に従って、各学科で該当するアクティブラーニングの下記項目をご記入ください。
科目名・必修選択・教員名・学年・受講人数・優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(〇でも結構です)

学科名	<p>①知識習得型 (Team-based Learning) 解答に必ず正解がある。講師が主導的に進行。学生がチームを作り「教え、学び合う」関係を作ることで、より実質的な知識の習得をはかる。</p>	<p>②課題解決能力養成型 (Problem-based Learning) 必ずしも正解がない課題を扱う。物事の考え方のプロセスを学んだり、その視点によって異なる考え方や結論などを理解したりする。学生同士が主体的に進行。</p>	<p>③新価値創造型 (Project-based Learning) 課題自体を発見し、その解決策を導く。学生同士が主導的に進行。</p>
薬学科	<p>①【科目名】解剖学概論 【必修選択】必修 【教員】内田友二 【学年】1年 【受講人数】148名 【リーダー】6名(24グループ)</p> <p>②【科目名】実務実習事前学習(I) 【必修選択】必修 【教員】宮村重幸 【学年】4年 【受講人数】124名 【リーダー】10名(12グループ)</p> <p>③【科目名】実務実習演習(4月～5月前半) 【必修選択】必修 【教員】宮村重幸・石黒 貴子 【学年】5年 【受講人数】122名 【リーダー】10名(12グループ)</p> <p>④【科目名】物理化学Ⅱ 【必修選択】必修 【教員】宮本秀一・下野和実 【学年】2年 【受講人数】157名 【リーダー】10名(15グループ)</p> <p>⑤【科目名】物理化学Ⅲ 【必修選択】必修 【教員】宮本秀一・下野和実 【学年】2年 【受講人数】157名 【リーダー】10名(15グループ)</p>	<p>⑥【科目名】早期体験学習 【必修選択】必修 【教員】石黒 貴子 【学年】1年 【受講人数】148名 【リーダー】10名(15グループ)</p> <p>⑦【科目名】生命倫理学 【必修選択】必修 【教員】中嶋 弥穂子・松倉 誠 【学年】1年 【受講人数】148名 【リーダー】6名(24グループ)</p> <p>⑧【科目名】医薬倫理学 【必修選択】必修 【教員】松倉 誠 【学年】4年 【受講人数】124名 【リーダー】8名(16グループ)</p> <p>⑨【科目名】実務実習事前学習(I) 【必修選択】必修 【教員】宮村重幸 【学年】4年 【受講人数】124名 【リーダー】10名(12グループ)</p> <p>⑩【科目名】実務実習事前学習(II) 【必修選択】必修 【教員】宮村重幸・瀬尾 量・松倉 誠・中嶋 弥穂子・山崎 啓之・藤井 繁・石黒 貴子・堀尾 福子 【学年】4年 【受講人数】124名 【リーダー】10名(12グループ)</p> <p>⑪【科目名】実務実習演習(4月～5月前半) 【必修選択】必修 【教員】宮村重幸・石黒 貴子 【学年】5年 【受講人数】122名 【リーダー】10名(12グループ)</p> <p>⑫【科目名】分析・物理化学実習 【必修選択】必修 【教員】竹下啓藏・岡崎祥子・宮本秀一・下野和実 【学年】3年 【受講人数】129名 【リーダー】10名(13グループ)</p> <p>⑬【科目名】生体分析科学 【必修選択】必修 【教員】竹下啓藏・岡崎祥子 【学年】5年 【受講人数】10名 【リーダー】1名(1グループ)</p>	<p>⑯【科目名】早期体験学習 【必修選択】必修 【教員】石黒 貴子 【学年】1年 【受講人数】148名 【リーダー】10名(15グループ)</p>

II – 3. 令和元年度の全学 SALC・学科 SALC での学修指導の時間割表

全学 SALC・学科 SALC での学修支援の時間割表（担当の先生および実施場所）
※下級生や他の学生からの学びに関する相談、質問に対応いたします。ぜひ、ご活用ください。 FC：ファシリテーター

月	火	水	木	金	
1限			情報SALC【F603】 : 学生FC		
2限	情報SALC【F603】 : 学生FC			機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC	
昼休み	空港SALC【206教室】 : 河野先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC デザインSALC【D406】 : 学生FC	空港SALC【206教室】 : 河野先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC 美術SALC【A408】 : 佐藤先生・学生FC	空港SALC【206教室】 : 河野先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC	空港SALC【206教室】 : 河野先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC	
3限		応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	情報SALC【F603】 : 学生FC		
4限	応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC		情報SALC【F603】 : 学生FC	
5限	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 菊田先生・学生FC 物理SALC【図書館1階】 : 天木先生・学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 学生FC 数学SALC【ANEX1階】 : 学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 進先生・学生FC 数学SALC【ANEX1階】 : 安藤先生	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 進先生・学生FC 物理SALC【図書館1階】 : 上野先生・学生FC 数学SALC【ANEX1階】 : 学生FC 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC ナ・SALC【N棟4階大学院講義室】 : 追口先生・学生FC 建築SALC【K101】 : 内丸先生・学生FC 数学SALC【図書館1階】 : 大嶋先生・学生FC 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC

全学 SALC・学科 SALC での学修支援の時間割表（担当の先生および実施場所）
※下級生や他の学生からの学びに関する相談、質問に対応いたします。ぜひ、ご活用ください。 FC：ファシリテーター

月	火	水	木	金
1限				
2限				
昼休み	空港SALC【206教室】 : 杉本先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC デザインSALC【D406】 : 学生FC	空港SALC【206教室】 : 杉本先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC ナ・SALC【M401】 : 追口先生・学生FC	空港SALC【206教室】 : 杉本先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC	空港SALC【206教室】 : 杉本先生 留学SALC【M2階国際交流C内】 : 留学FC
3限		ナ・SALC【M401】 : 追口先生・学生FC		
4限		情報SALC【F603】 : 学生FC		情報SALC【F603】 : 学生FC
5限	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 美術SALC【A408】 : 佐藤先生・学生FC 物理SALC【図書館1階】 : 天木先生・学生FC 情報SALC【F603】 : 学生FC 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 学生FC 数学SALC【図書館1階】 : 大嶋先生・学生FC 数学SALC【PH300】 : 安藤先生 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 進先生・学生FC 物理SALC【図書館1階】 : 上野先生・学生FC 数学SALC【PH300】 : 安藤先生 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC	機械SALC【I630】 : 吉良先生・学生FC 生命SALC【G315】 : 菊田先生・学生FC ナ・SALC【N棟4階大学院講義室】 : 追口先生・学生FC 建築SALC【K101】 : 内丸先生・学生FC 応微SALC【H-4階図書室】 : 学生FC

II - 4. 令和元年度の開催事業：ファカルティデベロッパー鍛成会

崇城大学大学教育再生加速プログラム（AP）事業

第29回 FDer 鍛成会

2019 崇城大学新人教員 FD 研修会事業



第1回大学人教育力養成講座

テーマ：「ベストティーチャーから学ぶ」

日時：2019年5月25日(土)13時00分～17時00分

場所：SoLA 2階 アクティブ・ラーニング教室 対象：教員・学生

講師：久次米先生(宇宙)

ファシリテーター：本田先生(株)LV)、吉良先生(FD委員)

本学では、一昨年度から、全学の教員、特に若手の先生を対象として、「大学人教育力養成講座」を開講しています。大学においては、教育と研究は車の両輪に例えられますが、近年、ステークホルダーから特に教育力が大学に求められています。しかし、アカデミアを目指す先生方は、学位の取得を通じて研究力は磨かれてきますが、教育力については、そのような機会がないままに、教壇に立っているのが現状です。若手の先生方や、教育経験の少ない企業から来られた先生方に、このような大学（特に本学）での教育力を身に着けていただこうと企画した講座です。目的、狙いは次の3つです。

- ① 学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- ② 学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」「学習アドバイジングスキル」について体験を通して学ぶ。
- ③ ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

第1回目の講座では、昨年度ベストティーチング賞受賞者の久次米先生(宇宙)から授業改善のポイントを話題提供いただき、学生へ向き合うスタンスを参加者全員で学び合いたいと思います。

年に一度の参加をお願いしているFD講演会の一環となります。皆様、奮ってご参加ください。（学生ファシリテーター・教職サークルにも参加を呼び掛けています）



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学教育再生加速プログラム（A P）事業

ファカルティ・ディベロッパー



第30回 FDer 錬成会 SALCネットの会

テーマ：「学科 SALC の活動状況報告」

日時：2019年6月27日(木)16時40分～18時10分

場所：図書館1階全学 SALC

対象：教職員、学生FC

ファシリテーション：本田先生(輔LV)

話題提供：ナノ SALC チーム

今回の FDer 錬成会・SALC ネットの会は、学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加者全員でグループ討議を行います。皆様、奮ってご参加ください。



第29回 FDer 錬成会(R1年度 第1回大学人教育力養成講座)の様子

担当：教務課 (内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.soho-u.ac.jp)

崇城大学教育再生加速プログラム（AP）事業

ファカルティ・ディベロッパー



第31回 FDer 錬成会 SALCネットの会

テーマ：「学科 SALC の活動状況報告」

日時：2019年7月24日(水)16時40分～18時10分

場所：SoLA 2階 アクティブ・ラーニング教室 B,C

対象：教職員、学生FC

ファシリテーション：本田先生(輪LV)

話題提供：応微 SALC チーム

今回の FDer 錬成会・SALC ネットの会は、学科 SALC の活動状況報告です。●各学科 SALC 等の利用状況の情報共有、●利用促進のための改善案の提案、●学科 SALC 活動の学内への周知とネットの拡大、●後輩のファシリテーター育成への協力 を目的として報告と提案を元に、参加者全員でグループ討議を行います。皆様、奮ってご参加ください。



第30回 FDer 錬成会の様子(R1.6.27 図書館 全学 SALC にて)

担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.soho-u.ac.jp）

崇城大学・熊本保健科学大学・熊本学園大学 大学間連携事業



大学教育再生加速プログラム特別講演会

崇城大学第32回FDer鍛成会 & 令和元年度第2回大学人教育力養成講座

「学習アドバイジングスキルとSALC活用について」

日 時: 2019年9月13日(金)13時~17時30分

場 所: 崇城大学 SoLA(予定)

対 象: 崇城大学及び連携大学の教職員及び学生の皆様



講師: 宝来華代子 先生(SILC/SALC)
大嶋康裕 先生(数学 SALC)・他

崇城大学では語学学習のための SALC(Self Access Learning Center)を2010年に設立。さらに2014年から順次、全学 SALC 学科 SALC を設け専門分野での自律学修者育成にも積極的に取り組んでいます。英語教育で始まった「学習アドバイジングスキル」を専門教育での SALC で活用するため、「学習アドバイジングスキル研修」を受講し全学 SALC で数学学習での学生サポートに活用されている大嶋先生と、英語専門職アドバイザーとして SALC で8年の経験を持つ宝来先生と一緒に学び合いたいと思います。

皆様奮ってご参加ください!



窓口 : 崇城大学 教務課 096-326-3111(代表) 096-326-3406(直通)
(内線:1132 e-mail: kyomu@ofo.sojo-u.ac.jp)

崇城大学大学教育再生加速プログラム事業



第33回 FDer 錬成会

～航空整備学・学士力養成講座～

「社会が求める大学卒・整備士とは」

日時：2019年9月19日（木）14時00分～16時00分

場所：崇城大学空港キャンパス シミュレータ棟 3階多目的教室

対象：宇宙航空システム工学科の教職員の方々

講師：全日空輸株式会社 整備センター 教育訓練部
細見 光徳 部長

Boeing B787、AIRBUS A380、・・・そしてスペースジェット・・・
次々と新しい旅客機が登場しています。

技術の進展とともに航空機の整備方式やその整備士に
求められるものも大きく変わりつつあります。

これからの整備士像とは？企業・社会が求める整備士
とは・・・？

そして我々、大学人が育てる整備士とは・・・？

全日空輸（ANA）の最前線の視点から貴重なお話を
頂きます。

担当：教務課（内線 1136 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学第34回FDer 錬成会・ SALCネットの会



「応用生命科学科 SALC の活用状況について」

日 時: 2019年10月29日(火)16時40分~18時10分

場 所: 崇城大学 SoLA2階(予定)

対 象: 崇城大学の教職員及び学生 FC の皆様

講師: 斎田 哲也 先生(生命 SALC)
学生ファシリテーター(生命 SALC チーム)

現在、全学 SALC 学科 SALC の利用促進、授業外学修時間の確保、学生の自律学修マインド醸成のために、各 FDer の先生方、各学科学生 FC に学科 SALC 活用事例を報告していただいております。今回は、現在、授業の中で活用されている応用生命科学科の SALC 活用例をご紹介いただき、皆様で情報共有したいと思います。

皆様、奮ってご参加ください。



窓口 : 崇城大学 教務課 096-326-3111(代表) 096-326-3406(直通)
(内線:1136 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp)

崇城大学大学教育再生加速プログラム（AP）事業

第35回 FDer 錬成会

2019 崇城大学新人教員 FD 研修会事業



第3回大学人教育力養成講座

テーマ：「ベストティーチャーから学ぶ」

日時：2019年11月11日(月)13時00分～17時30分

場所：SoLA 2階 アクティブ・ラーニング教室 対象：教員・学生

講師：岩本晃代先生(総合)、山口幸輝先生(薬学)

ファシリテーター：本田先生(株LV)、吉良先生(FD委員)

本学では、一昨年度から、全学の教員、特に若手の先生を対象として、「大学人教育力養成講座」を開講しています。大学においては、教育と研究は車の両輪に例えられますが、近年、ステークホルダーから特に教育力が大学に求められています。しかし、アカデミアを目指す先生方は、学位の取得を通じて研究力は磨かれてきますが、教育力については、そのような機会がないままに、教壇に立っているのが現状です。若手の先生方や、教育経験の少ない企業から来られた先生方に、このような大学（特に本学）での教育力を身に着けていただこうと企画した講座です。目的、狙いは次の3つです。

- ① 学生と向き合い、学生との関係性を高めるために、相手の立場に立ったコミュニケーションのあり方を理解する。
- ② 学生の力を引き出す支援のスタンス、「ファシリテーション」「対人関係力」「学習アドバイジングスキル」について体験を通して学ぶ。
- ③ ベストティーチャーからの授業改善のポイントを教員同士で学び合い、チームビルディングを行う。

第3回目の講座では、今年度のベストティーチング賞受賞者から授業改善のポイントを話題提供していただき、学生へ向き合うスタンスを参加者全員で学び合いたいと思います。

年に一度の参加をお願いしているFD講演会の一環です。皆様、奮ってご参加下さい（学生ファシリテーター・教職サークルにも参加を呼び掛けています）。



担当：教務課（内線 1132 e-mail: kyomu@ofc.sojo-u.ac.jp）

崇城大学第36回FDer 錬成会



「実務実習前後に薬学部5年生に対して 実施した PROG テスト結果報告会」

日 時: 2020年3月9日(月) 13時30分~15時00分

場 所: 崇城大学薬学部 PH306 教室

対 象: 崇城大学の教職員の皆様

講師: 株式会社リアセック

キャリア総合研究所 主任研究員

石川 純一 先生

PROG テストとは「社会で求められる汎用的な能力・態度・志向=ジェネリックスキルを測定」するものとのことです。薬学部5年生は実務実習前後に本テストを実施していることから、実務実習を通して、学生の能力・態度・志向がどのように変化したのかについて解説頂きます。

ご興味がある先生は、ぜひご参加ください。



窓口 : 崇城大学 教務課 096-326-3111(代表) 096-326-3406(直通)
(内線:1132 e-mail: kyomu@ofc.soho-u.ac.jp)

II – 5. 令和元年度の広報活動：本 AP 事業のパンフレット作成

○崇城大学大学教育再生加速プログラムの取組みについて Vol.6

大学教育再生加速プログラム 事業選定
Acceleration program for promoting university education

vol.6


崇城大学

大学教育再生加速プログラムの取組について

テーマ I
アクティブラーニング [Active learning]

 崇城大学

**令和元年度
FDer練成会の活動実績(一覧)**

平成31年度・令和元年度は、右記のように8回のFDer練成会の活動を行いました。

●第29回FDer練成会:2019/5/25
第1回大学人教育力養成講座「ベストティーチャーから学ぶ」

●第30回FDer練成会:2019/6/27
SALCネットの会「学科SALCの活動状況報告」

●第31回FDer練成会:2019/7/24
SALCネットの会「学科SALCの活動状況報告」

●第32回FDer練成会:2019/9/13
第2回大学人教育力養成講座

●第33回FDer練成会:2019/9/19
航空整備学・学士力養成講座「社会が求める大学卒・整備士とは」

●第34回FDer練成会:2019/10/29
SALCネットの会「SALCの活動状況報告」

●第35回FDer練成会:2019/11/11
第3回大学人教育力養成講座「ベストティーチャーから学ぶ」

●第36回FDer練成会:2020/3/9
「実務実習前後に英語学部5年生に対して実施したPROGテスト結果報告会」※新コロナウイルス感染防止対策のため中止

■ 第29回FDer練成会 ■ 第31回FDer練成会

■ 本事業(取り組み期間:平成26年度～平成31年度)が最終的に目指す数値目標

具体的な実施計画における指標	平成25年度(実績)	平成26年度(実績)	平成27年度(実績)	平成28年度(実績)	平成29年度(実績)
アクティブラーニングを導入した授業科目の割合(科目数で算定)	8.2%	20.0%	21.0%	23.0%	26%(25%)
アクティブラーニングを導入した科目のうち、必修科目の割合	53.3%	61.0%	62.0%	68.0%	73%(70%)
アクティブラーニングを受講する学生の割合(卒研は除く)	48.2%	92.9%	90.0%	100%	100.0%(100%)
学生1人あたりのアクティブラーニング科目受講数	0.87科目	3.70科目	4.00科目	4.50科目	4.8科目(2.20科目)
アクティブラーニングを行う専任教員の割合	25.9%	52.8%	63.2%	66.8%	74%(60%)
学生1人あたりのアクティブラーニング科目に関する授業外学習時間	2.3時間/週	5.0時間/週	5.0時間/週	5.2時間/週	6.5時間/週(4.0時間/週)
ファカルティデベロッパー数	0人	17人	18人	20人	24人(23人)
アクティブラーニングに関するFD受講者数	0人	120人	167人	220人	210人(23人)
優れたリーダーシップを持つ学生の養成数(約3,500人中)	200人	911人	899人	982人	941人(900人)

(最終目標)

 崇城大学 崇城大学 大学教育再生加速プログラム アクティブラーニング:[問い合わせ先]崇城大学 教務課〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1 TEL:096-326-3406



本学の大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

本学独自の英語教育施設（SILC: Sojo International Learning Center）に併設した自律学修センター（SALC: Self Access Learning Center）では、

学生が主体的に学修し年間利用者数が4年間で12倍に拡大しました。

このSALCのノウハウを全学に普及させ学生の自律学修のマインドを醸成することとも、

専門科目のアクティブラーニング（AL）化を推進するために全学 SALC / 学科 SALC を設置し、利用時間を可視化して単位の実質化を目指します。

令和元年度 大学教育再生加速プログラム特別講演会

2019年9月13日(金)大学教育再生加速プログラム特別講演会(FD講演会)
「テーマ:学習アドバイジングスキルとSALC活用について」を開催しました。
今回は、「学習アドバイジングスキル」について本学の英語自律学修センター（SILC/SALC）のラーニングアドバイザーである宝来先生から、数学SALCのスキル活用事例を大崎先生から、合わせてナノサイエンス学科SALCの報告を迫口先生および大学院生2名からご講演いただきました。



宝来先生のご講演の様子

崇城大学・熊本保健科学大学・熊本学園大学 大学間連携事業
大学教育再生加速プログラム特別講演会
崇城大学第32回「For 錦糸会 & 令和元年度第2回大学人材育力養成講演会」
「学習アドバイジングスキルとSALC 活用について」

日 時: 2019年9月13日(金)13時~17時30分
場 所: 崇城大学 SoLA(予定)
対 象: 崇城大学及び連携大学の教職員及び学生の皆様

講師: 宝来華代子 先生(SILC/SALC)
大崎康裕 先生(数学SALC)・他

崇城大学では留学生たちのための SALC(Self Access Learning Center)を2010年に創立。さらに2014年から始まり、今後 SALC と称する SALC を計画部門分野での自律学修者育成にも積極的に取り組んでいます。英語教育で始まった「学習アドバイジングスキル」を専門的教育での SALC で活用するため、「学習アドバイジングスキル研修」を実施し、全学 SALC で数学学習での学生サポートに活用されている大崎先生と、英語専門塾アドバイザーとして SALC で8年の経験を持つ宝来先生と一緒に学びたいと思います。

皆様お説明ありがとうございます!

窓口: 崇城大学 教務課 096-326-3111(代) 096-326-3408(直通)
(内線: 1132 e-mail: kyomur@ufs.ssq-u.ac.jp)



グループワークを行いました。

グループごとに意見をまとめて発表



参加者の集合写真。尚、熊本保健科学大学、熊本学園大学からもご参加頂きました

II – 6. 令和元年度の広報活動： 大学ホームページへの本 AP 事業のページ作成

28年度より、大学HPにAP事業のサイトを開設した。 <http://ap.ed.soj-u.ac.jp/>

II – 7. 令和元年度の学生の主体的な活動

1) タイ農業発展に挑戦中の本学3年生が文部科学省「トビタテ文化祭」でグランプリ受賞

2020年2月16日(日)、文部科学省講堂にて開催された「トビタテ文化祭 by 世界を見てきた学生たち」において、「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム地域人材コース」に挑戦している本学の末永さん(生物生命学部応用生命科学科3年)が、留学の様子をポスターで発表し、ブース部門グランプリを受賞しました。



2) 本学大学院生が起業した(株)Ciomoが「地方創生ビジネスコンテストみんなの夢AWARD」でグランプリ受賞
 (株)Ciomoの代表取締役である古賀さん(工学研究科博士前期課程応用生命科学専攻2年)が、2019年3月に熊本市で初めて開催された「地方創生ビジネスコンテスト みんなの夢AWARD」で、(株)Ciomoの活動内容や今後の目標について発表し、サポート起業や審査員、観覧者からの投票によりグランプリを受賞しました。



SPICE
ワーキングウーマン
vol.40

女性のアイデアを社会に役立つ事業へ

女性の働き方の選択肢が増え、活躍の場が広がっています。ソーシャルビジネスを行なう「女性社会起業家」も増えているそうです。3月、熊本市で初めて開催された「地方創生ビジネスコンテスト みんなの夢AWARD」熊本大会では、県内在住の女性起業家たちが、「橋本を今よりも元気にする」アイデアを発表しました。

「みんなの夢AWARD」熊本大会開催

「ソーシャルビジネス」とは、貧困、差別、環境、まちづくりなどの社会的課題の解決に、ビジネスとして取り組む事業のことです。

「みんなの夢AWARD」を全国的に展開する「公益財団法人みんなの夢をかなえる会」専務理事・中川直洋さんは「女性は男性に比べ、職場で不平等を感じたり、子育てや介護で社会的課題に直面したりする場面が多い。それを解決するため、自らビジネスを立ち上げる女性が増えています」と話します。また、そうしたソーシャルビジネスが地場企業と結び付き、地方創生につながる例も多いのだそう。

「みんなの夢AWARD in 熊本」では、県内の女性6人が事業プランを発表し、その夢を応援する企業とのマッチングを行いました。地場企業の応援を受け、彼女たちの夢が事業となり社会課題を解決する糸口に、さらには橋本を元気にする起爆剤になるかもしれません。

女性社会起業家フレンチー

「フレンチーの夢を実現したい」というサポート企業が、自身が書いたブックカードを展示。

「みんなの夢AWARD」とは?

ソーシャルビジネスのアイデア(=夢)を持った起業家たちが、サポート企業の前にプレゼンテーションを行う日本最大規模の祭典。グランプリ受賞者には、参天臍血や經營支援などが提供されます。

熊本大会の6人のプレゼンターは、事前に社会起業家養成の専門家による指導を受け、ビジネスプランを磨き上げて登壇。プレゼン後、サポート企業や審査員、観覧者からの投票でグランプリを決定しました。

熊本大会の主催「みんなの夢AWARD in 熊本プロジェクト(ユースプランニング)」は、毎日新聞社・公益財団法人みんなの夢をかなえる会

球磨焼酎かずを有効活用して、地元・人吉と熊本の力になりたい

出身地である人吉球磨の特産・球磨焼酎を作る時に出る焼酎かすの廃棄に莫大な費用がかかることを知り、「焼酎かすを地元の富にしたい」と有効活用する研究を開始。醸造物の成長を促したり、畜産場の良いいを抑えたりする効果のある光合菌培養にて着目し、焼酎かすが光合菌培養の培养液になるとことを発見しました。

2018年に光合球磨園場運営キット(くまじット)を開発し、18年4月、熊本大学の出資を受けて「株式会社Ciomo」を設立。現在は、水産業への事業拡大を目指し、クリスマスビの新規実験を行っています。今後、「くまレッド」の販路を全国、世界へと広げ、「10年後に1億円の売り上げ」を目指しています。

古賀さんの起業までの流れ

「くまレッド」開発、熊本県大分県に進出、大学の起業部に入部して酒類コストを下げる方法を大学で磨く、新規事業開拓、地元の課題に因縁

株式会社Ciomo(シモ)
代表取締役
熊本大学大学院工学研究科
応用生命科学専攻2年
古賀 睦さん(25)

女性の働き方の選択肢が増え、活躍の場が広がっています。ソーシャルビジネスを行なう「女性社会起業家」も増えているそうです。3月、熊本市で初めて開催された「地方創生ビジネスコンテスト みんなの夢AWARD」熊本大会では、県内在住の女性起業家たちが、「橋本を今よりも元気にする」アイデアを発表しました。

「ソーシャルビジネス」とは、貧困、差別、環境、まちづくりなどの社会的課題の解決に、ビジネスとして取り組む事業のことです。

「みんなの夢AWARD」を全国的に展開する「公益財団法人みんなの夢をかなえる会」専務理事・中川直洋さんは「女性は男性に比べ、職場で不平等を感じたり、子育てや介護で社会的課題に直面したりする場面が多い。それを解決するため、自らビジネスを立ち上げる女性が増えています」と話します。また、そうしたソーシャルビジネスが地場企業と結び付き、地方創生につながる例も多いのだそう。

「みんなの夢AWARD in 熊本」では、県内の女性6人が事業プランを発表し、その夢を応援する企業とのマッチングを行いました。地場企業の応援を受け、彼女たちの夢が事業となり社会課題を解決する糸口に、さらには橋本を元気にする起爆剤になるかもしれません。

女性社会起業家フレンチー

「フレンチーの夢を実現したい」というサポート企業が、自身が書いたブックカードを展示。

「みんなの夢AWARD」とは?

ソーシャルビジネスのアイデア(=夢)を持った起業家たちが、サポート企業の前にプレゼンテーションを行う日本最大規模の祭典。グランプリ受賞者には、参天臍血や經營支援などが提供されます。

熊本大会の6人のプレゼンターは、事前に社会起業家養成の専門家による指導を受け、ビジネスプランを磨き上げて登壇。プレゼン後、サポート企業や審査員、観覧者からの投票でグランプリを決定しました。

熊本大会の主催「みんなの夢AWARD in 熊本プロジェクト(ユースプランニング)」は、毎日新聞社・公益財団法人みんなの夢をかなえる会

球磨焼酎かずを有効活用して、地元・人吉と熊本の力になりたい

出身地である人吉球磨の特産・球磨焼酎を作る時に出る焼酎かすの廃棄に莫大な費用がかかることを知り、「焼酎かすを地元の富にしたい」と有効活用する研究を開始。醸造物の成長を促したり、畜産場の良いいを抑えたりする効果のある光合菌培養にて着目し、焼酎かすが光合菌培養の培养液になるとことを発見しました。

2018年に光合球磨園場運営キット(くまじット)を開発し、18年4月、熊本大学の出資を受けて「株式会社Ciomo」を設立。現在は、水産業への事業拡大を目指し、クリスマスビの新規実験を行っています。今後、「くまレッド」の販路を全国、世界へと広げ、「10年後に1億円の売り上げ」を目指しています。

古賀さんの起業までの流れ

「くまレッド」開発、熊本県大分県に進出、大学の起業部に入部して酒類コストを下げる方法を大学で磨く、新規事業開拓、地元の課題に因縁

株式会社Ciomo(シモ)
代表取締役
熊本大学大学院工学研究科
応用生命科学専攻2年
古賀 睦さん(25)

3) 教職希望学生が学修サークルを立ち上げ現役採用試験 3年連続合格者輩出

教員採用試験の現役合格を目指す学修サークル「教職サークル」が27年度より立ち上がりましたが、平成28年度・平成29年度・平成30年度と連続して、教員採用試験の現役合格者を輩出している。本学には教育学部はない中で、学生が主体的に学んだ成果の一つと考えられる。

SOJO UNIVERSITY

 崇城大学
SOJO UNIVERSITY

崇城大学AP事業

 大学新規再生支援プログラム

● AP事業によって学生の方に起こった変化（教職サークル発足）

2015年9月 全学SALCを利用した学生の自律学修サークルが立上げ

博士2年から学部1年まで、
教職(工業・情報・理科・美術)
を目指す学生が、自主的に
学修するサークル





SOJO UNIVERSITY



現役教員や学生を前に模擬授業を行う教職サークル学生

II – 8. AP 中間評価に対する対応

1) 学習アドバイジングスキルを専門科目の学修に活かすには

「学習アドバイジングスキル」を学内教員および学外に普及させるために、AP 中間評価でも求められた「学習アドバイジングスキルガイドブック」(1st Ed.) を作成した（別冊子参照）。

以下に、このスキルを専門科目の学修に活かすための提言をまとめた。

「学習アドバイジングスキルを専門科目の学修に活かすには」

これまでに紹介した学習アドバイジングスキル自体は決して1つ1つのスキルが新しく開発されたものとは言えないだろう。既に多くの分野でこのようなスキルを活用した対話により問題解決へと取り組む手順は活用されているだろう。しかし、教育現場でこのような取り組みが普及されていないのは、多くの場合において活用するための十分なスキームが確立されていないからではないだろうか。アドバイジングスキルの研修参加で満足するなど一過性の取り組みや限られた専門職アドバイザーのアドバイジングスキルの活用に留まっているなども考えられるだろう。

アドバイジングスキルの普及に際し、本学の取り組みを特徴づけるならば、各学科 SALC を設立し、従事する教員と学生が共にアドバイジングキルを学び理解し、その後も錬成会等で技能や技術を研磨する取り組みを継続してきた点であるだろう。さらに学生との対話では「答えを教えない」ことを念頭に置き、アドバイジングスキルを活用し、学生の気づきを促進させる取り組みを意識的に行ってきた。既にアドバイジングスキルで紹介したような対話を無意識に活用されている優れた教員はきっと多いだろう。しかし、これを意識的に活用することは、特に学修習熟度が不十分な学生に対して「答えを教えない」指導をどのように行い、最小限の足場架けを行うことで、学生の気づきを促すことを可能とする。アドバイジングスキルを活用し学生の気づきを導き出す手順は、それぞれのケースで異なり、一元化することはできないが、一般の教員が学び、意識的に活用を継続することで、異なる学生のレベルに適切に力を引き出すことを可能とできるだろう。アドバイジングスキルは万能薬ではなく、それぞれの過程で適切に変化させ意識的に活用すべきである。そしてアドバイジングスキル活用の普及や促進に向けて本学での取り組みを通して確立されたスキームは、今後、多くの分野や他大学での活用においても再現再利用できると思われる。

数学 SALC における学生相談の事例を見ていくと、場面に応じたアドバイジングスキルの活用を行なっていることが分かってきた。数学 SALC での学生相談には大きく分けて2種類あり、特定の単元や問題の理解をしたいという相談と、特定の分野の学修計画をどのように立てたら良いかという相談である。前者については、例えば問題の解法に悩む学生に対して「沈黙」で時間を与え、「強調」で解法に関して重要な箇所を提示し、解答後は「ポジティブフィードバック」で自身の解法を振り返らせるといったアドバイジングスキルを活用できる。後者については、学修計画を立てられない学生に対して「うなづき」や「共感」を使って心理的距離を縮めつつ、「言い換え」で目標が何かを明確にしていき、「関連付け」で目標へ向かう計画の構築を促し、「催促」で小さい目標を立てさせて行動を働きかける、などと学生に対して使っていた。数学 SALC におけるアドバイジングスキルの活用の重要性は、内容や場面に応じて複数のアドバイジングスキルをセットにして使うことにあり、そしてそのセットは他のケースでは直接使用できないまでも、他の待機する教員や学生に共有可能な経験となってきたと考えている。

2) 事業評価のための学内アンケート及び外部テストの活用

2-1) 卒業時アンケート調査の実施

本事業の評価の一環として、2018年11月～2019年1月の期間に、工学部・情報学部・生物生命学部の4年生、及び薬学部6年生に、本学総合企画課（IR）がアンケート調査を実施した。対象人数は774名で、回答者数は717名、回収率92.6%であった。本AP事業に関連する項目とその回答について、以下に記す。

○大学入学前との知識・能力の変化

「主体的に学ぶ力」：向上した82.6%、向上しなかった17.4%

「課題解決力」：向上した87.4%、向上しなかった12.6%

「リーダーシップ力」：向上した57.2%、向上しなかった42.8%

○「主体的に学ぶ力」が向上した学生の割合が高い学科

宇宙航空システム工学科（操縦）100%、美術学科94.7%、

デザイン学科93.1%、薬学科90.2%

○知識や能力を身に付けるための学内施設利用頻度

図書館74.9%、実習室・実験室67.2%、SILC/SALC34.4%

全学SALC35.4%、学科SALC27.1%

○図書館を利用した学生の割合が高い学科

宇宙航空システム工学科（操縦）95.2%、応用生命科学科91.5%、

ナノサイエンス学科87.0%、建築学科81.4%

○全学SALCを利用した学生の割合が高い学科

宇宙航空システム工学科（操縦）81.0%、建築学科47.1%

機械工学科46.5%、宇宙航空システム工学科（システム）45.5%

○学科SALCを利用した学生の割合が高い学科

宇宙航空システム工学科（操縦）61.9%、宇宙航空システム工学科（整備）40.0%、建築学科40.0%、機械工学科33.8%

○SILC/SALCを利用した学生の割合が高い学科

宇宙航空システム工学科（操縦）66.7%、宇宙航空システム工学科（システム）45.5%、宇宙航空システム工学科（整備）40.0%、建築学科40.0%

○自学自習スペース（SALC）の利用目的

専門分野の勉強50.3%、課題作成36.9%、ゼミ活動5.0%

30年度の卒業予定者を対象に学内アンケートを実施した結果、717名（回答率92.6%）の内、主体的に学ぶ力が本学で付いた答えた学生が82.6%に及んだ。また、知識や能力を身に付けるための学内施設利用頻度として、74.9%の学生が図書館を、35.4%の学生が全学SALCを挙げた。中でも良く利用しているのは、宇宙航空システム工学科（操縦）であった。さらに、SALCの利用目的として多かったのは、専門の勉強50.3%であった。

概ね、全学SALC・学科SALCの存在は学生に知られるようになったが、今後同じ卒業時アンケートを続け、さらなるSALC利用の定着を図るための参考データとしたい。

2-2) 社会人基礎力に関する外部テスト (PROG) の活用

APの中間評価に対応するため、学生の主体性の成長を客観的に評価する指針を得るために行ったPROGテストにおいて、知識活用力を示すリテラシーがトップであった薬学科(全国平均スコア4.4に対し5.7)では、主体性を含むコンピテンシーが全国平均スコア3.5に対して2.7と学内最下位であった。この結果を踏まえ、薬学科では学生の主体性の醸成を含むコンピテンシー（経験をもとにした成果につながる行動特性）を向上させるための教育について学ぶ機運が高まった。

そこで、昨年4年次に受験した学生(122名)に、5年次で同じPROGテストを令和元年11月に受験させた(121名)。その結果、コンピテンシー平均2.7が、1年間で2.94まで向上し、特に自己基礎力に伸びが見られた(図1参照)。

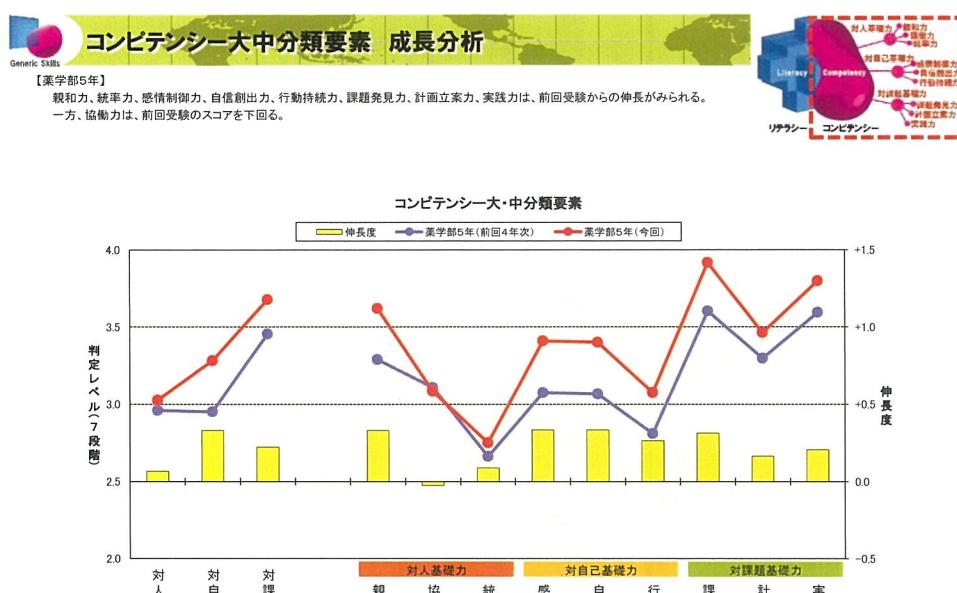


図1 薬学科学生の4年次からの1年間の成長分析 (PROGテスト大中分類)

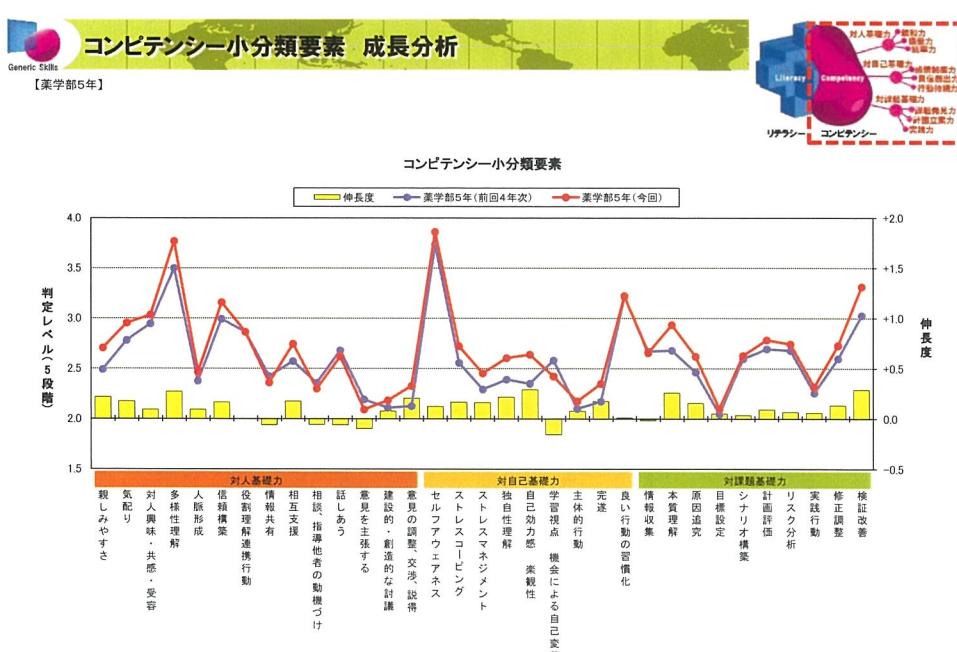


図2 薬学科学生の4年次からの1年間の成長分析 (PROGテスト小分類)

また、図2のPROGテスト小分類要素を見ると、対自己基礎力の中の自己効力感・楽観性が伸びていることが分かる。この項目は、自信創出力につながり、生涯にわたって自己研鑽を積むことができる資質の醸成につながると思われる。

但し、4年制大学4年生のコンピテンシー全国平均は3.5であるので、薬学科5年生のコンピテンシー(2.94)はまだ低いといえる。薬剤師に求められる資質の多くは、リテラシーはもとより、コンピテンシーの関連するものが多いため、今後も薬学科教員と連携し、教育に反映していきたい。これらのデータを元に、第36回FDer錬成会【(対象:全教職員(特に薬学科教職員)・学生、テーマ:「実務実習前後に薬学部5年生に対して実施したPROGテスト結果報告会、話題提供:(株)リアセック キャリア総合研究所 主任研究員 石川純一先生)】を開催予定であったが、新型コロナウィルス感染防止対策のため中止となった。

2-3) 社会人基礎力に関する外部テスト(MATCH plus)の活用

令和元年4月(新入生)及び9月(3年生)にマイナビMATCH plusという社会人基礎力(前に踏み出す力・考え方抜く力・チームで働く力(全12社会人基礎力))測定の外部テストを、(株)マイナビの協力を得て実施した。

このテストは、日頃学生が良くとる行動について、全132問を約20分で各自が回答していく、その回答から、各自の社会人基礎力を10段階で評価するものである。数万人規模の全国の大学生が同じ設問に回答するため、本学の学生の社会人基礎力を全国の学生の平均値と比較することができる。数値の統計的有意差を検定しているものではないが、今後、毎年同じタイミング(4月(新入生)及び9月(3年生))で実施することで、本学の全体的傾向が把握できると考えている。

このテストの結果、表に示したように、MATCH plusでは、社会人基礎力12項目の内、全国平均(数万人規模の調査)に比べて、本学入学時には、平均以上の項目が3項目(実行力、状況把握力、規律性)であったものが、3年次後期には5項目に向上し、上記三項目に加えて、働きかけ力・課題発見力が向上したことが示された。本学AP事業で目指したものは、自律学修マインドの醸成であり、社会人基礎力の3つの力の内、「前に踏み出す力」の中の2項目(働きかけ力・実行力)が向上したことは取組の評価につながると考える。

また、本学の1年次と3年次で比較した場合、12項目中8項目で向上が見られた。一方で、主体性については、1年次から3年次にかけて低下してしまった。このMATCH plusでは、日頃学生が良くとる行動について、全132問を約20分で各自が回答していくものであるが、この主体性に関連する問い合わせ(株)マイナビと連携して分析していきたい。

さらに、上記の表は、10段階評価での本学全体の平均スコアを、各社会人基礎力ごとに示したものであるが、実際には、各学科毎の平均スコアのデータも(株)マイナビとの連携で解析できており、今後の学科毎の本事業の取組(学科SALCの利用率、図書館の活用率、学習アドバイジングスキルの活用等)と、この外部テストとの相関について解析していく予定である。

表 社会人基礎力(マイナビMATCH+ 本学学生と全国平均との比較)

		全国平均 (数万人 規模)	全国平均よりも高い 1年次より向上している	全国平均よりも低い 1年次より低下している	崇城大学平均 1年生 2019.4 (876人) 3年生 2019.9 (597人)
社会人基礎力 (各因子10点満点)	前に踏み出す力 (アクション)	主体性	5.1	5.0	4.7
		働きかけ力	5.4	5.4	5.6
		実行力	5.3	6.2	6.3
	考え方力 (シンキング)	課題発見力	5.0	4.9	5.1
		計画力	6.5	5.9	6.1
		創造力	6.1	4.4	4.7
	チームで働く力 (チームワーク)	発信力	5.7	4.9	5.1
		傾聴力	6.5	6.2	6.2
		柔軟性	6.9	6.4	6.3
		状況把握力	5.0	6.6	6.7
		規律性	5.7	6.7	6.6
		ストレスコントロール力	6.2	5.6	5.6



崇城大学 大学教育再生加速プログラム 運営委員会

〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1
TEL:096-326-3111(代) FAX:096-326-3000